

---

# ネギま！？ 原作破壊物語

零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！？ 原作破壊物語

### 【Nコード】

N4961K

### 【作者名】

零

### 【あらすじ】

神のミスにより頭に隕石がぶつかり死亡してしまう主人公。どうやら転生させてくれるようで行き先は『ネギま！？』  
そんな死亡フラグ満載な場所に転生させられるが、願い事でチート仕様にしてもらったので大丈夫 さあ原作破壊と行きますか！

## プロローグ（前書き）

この小説は作者の気分次第で執筆されるものです。

従って馬鹿みたいに更新が遅いです。

後、気持ち悪いくらいに厨二病です。（作者は受験のために病んでいるためw）

それでもいいと言う方のみ閲覧してください。

上記の内容を許せない方は即刻に戻るボタンを押すことをオススメします。

では、本編の方へと移させていただきます。

## ブローグ

「さーで、今日の晩飯は何にしようかな？」

俺はサイフ片手に商店街を歩いていく。

おっと、自己紹介が遅れたな。

俺の名前は神宮 じんぐう 運命 さだめ 16歳だ。

え？ 名前がおかしい？

俺に言っなッ！

俺だって気にしてんだよ！

こんな名前のせいで学校じゃイジメられてたんだよ！

…… まあイジメてきた奴は一人残らずシメてきたけど。

そのおかげで友達がいらないんだよ……

俺の友達に2次元世界の皆になっちまったんだよ……

そんな可哀想な少年なんだ、俺って奴は……

「はあ…… 何考えてんだ、俺？」

いきなり心の中で自己紹介した自分を気味悪く思う。  
最近なぜか情緒不安定になることが多々ある。

「はあ…… 地球滅びなえかなあ……」

厨二病患者に多々見られる発言をしでかす俺。

…… 厨二病は克服したと思ったのに……。

「あ、でもエロゲの新作やってねえからや『バゴンッ！』」

轟音と共に俺の意識は無くなった。

俺は気を失っていたんだろうか。

轟音と同時に気を失い、たった今、気が付いた。

「……？」

先ほどまで居た商店街ではなく、真っ白い、どこまでも続いているような空間に俺は居た。

全てが真っ白いので距離感が掴めない。

この空間がどこまで続いているのか。

この空間に出口があるのかなど俺には想像がつかない。

「これは……夢、か？」

普通では存在しそうなもない空間を見るに、この現象は俺の夢であり、俺の頭の中の想像が造り出した産物ではないかと疑う。

「それは違うぞい」

「ッ！？ 誰だ！？」

俺は辺りを見渡す。

しかし誰一人として人影が見えない。

さっき辺りを見渡した時も誰もいなかった筈だ。

それなのに声が聞こえる。

「僕はここじゃ」

「どこだよ！ 俺の周りには誰もいねえよ！」

俺は叫ぶ。

誰も居ないのに居ると言われる、この薄気味悪い現象をどうにか止めようと必死に声の在り処を探す。

「ほえ？ お主には僕の姿が見えぬのか？」

「さつきから見えねえって言ってるだろうが！」

「……………おお！ 僕ってまだその空間に転移してなかったんじゃない？」

「死ねやコラ」

そう言うと、いきなり俺の前にかにも神です！ という感じの老人が現れた。

老人は光輝くローブを着ているが、正直趣味が悪い。てか眼が痛い。

「誰だ、アンタ……………」

「僕か？ 僕は神じゃよ？」

コイツが神？

明らかに趣味の悪いジジイにしか見えない。

「んで紙様よお。ここはどこだ？」

「紙じゃなくて神な？ ここは死後の世界じゃよ」

は？

死後の世界？

何で俺そんなところにいんの？

「お主は死んだからのぉ」

「待て待て待て。俺はさっきまで商店街を歩いていた筈だが？」

そっぴゃここに来る前に轟音を聞いたような……

「うむ。お主は隕石が直撃して死亡したの」

「隕石って……」

どんだけ俺の運は悪いんだよ……

隕石が降ってくる確率はおろか、それに直撃する確率って宝くじ当てる確率より低いだろうが……

「まあそれは儂のせいなんじゃがな」

「まずは腰を回転さし、それと同時に捻りに捻ったストレートを放つ！」

「ぐぼらっ！？」

いい吹っ飛びだ。

流星は俺のストレート。

なかなかの威力だったZ E

「痛たた……お主は老人は労わるものだとかえられなかったのかの？」

「あいにく神は労われとは教えられなかったな」

普通なら労わってもいいかも知れんが、今回は無理だろ？  
なんで自分を殺したやつを労わらなくちゃいけないんだよ。

「んで？　それで俺に何か用事か？　死んだんだつたらとつと天国に連れていけ」

「……何の疑いもなく自分が天国に行けると思っているのは凄いとじゃの」

当り前だろ？

俺って特に悪いことしてないし？

「はあ……お主が行くのは天国じゃないぞ？」

「なん……だと……！？」

嘘……だろ？

俺が

「お主は転生してもらっ」

「地獄い……って、え？」

転生？

「そっ、転生じゃ」

「生き返られるのか？」

「そっじゃの。まあ儂のミスで死んでしまったからの。このくらいはしないとな」

なんだ……

生き返られるのか……

って、え？

「お前のミス？」

「そっじゃ」



「体を一回転させて勢いよく蹴りを放つ！」  
「びぐざむっ!?!」

もう一度吹き飛ばす。

数多ものヤンキーを沈めた蹴りは錆び付いていないようだな!

「ホント勘弁してください……」

「はぁ……わかったよ。んで場所は?」

「そろそろ判明する頃じゃが……お、来た来た」

手下に振ってくる一枚の神。あ、違った、紙。  
ついでにもう一枚降ってくる。

「なんだそれ?」

「お主の転生場所と願い事を聞く数じゃよ」

マジで!?!

願い事も聞いてくれんの?

「よし、発表するぞ。転生場所は」

「ドキドキドキ」

何故か擬音語を発声する俺。

中々ノリがいいだろ?

「ネギま!?!じゃ」

「どんだけー」

おいおい。

あんな死亡フラグ満載の漫画に転生しろと言うのか?

「それで願い事の数が5個じゃな」

「……それは多いのか？」

「そうじゃの。基本的に3個じゃから多い方じゃの」

なかなか多いんだな。

願い事の数って。

「それじゃ5個の願い事を決めるんじゃ」

「さっそくかよ……」

どうするか……

ネギま！？は死亡フラグ満載がだからこれでもか！　というほどチ

ートにしないと生き残れないだろうし……

てかチートにしても生き残れるのか？

あの世界には生きるバグキャラとかいるんだぞ？

「決まったかの？」

「ああ。んじゃ言っていくぞ。

1、身体能力、気、魔力ともに最強。顔もイケメンに変えといてくれ。後、この世界の力に関するもの全て最強で」

「まあ大丈夫じゃの」

まずこれで基本構造は大丈夫つと。

まあこれがないや生き残ることも出来んだろうがな！

「次行くぞ。

2、不老不死」

「不死は無理じゃな。不老は大丈夫じゃが」

やっぱり無理か……  
真祖になるのは嫌だし……

「なら自分で年齢の上げ下げを出来るようにしてくれ。それなら不老にもなれるだろ」

「それなら大丈夫じゃ」

まあしょうがないか。

「3、神の魔法とされる“時間”“空間”“創造”“破壊”の使用」  
「……“時間”と“空間”は完全とはいかないが使用可能じゃの。じゃが“創造”と“破壊”は駄目じゃ。それでもいいかの？」

「どれくらいの使用が可能なんだ？」

「“空間”は別次元に行ったりするのが無理で“時間”が過去、未来に行ったり、時間の完全停止は無理じゃ。加速や減速などは使えるがの」

チツ。

まあ許容範囲……か？

「OK。それで大丈夫だ」

「わかった。まあもしかしたらその次元に辿り着けるかも知れんがの」

マジで!？

それなら万々歳じゃねえか！

「んじゃ次い。」

4、FF歴代の召喚獣の使用権利」

「まあ、大丈夫じゃの。しかしエデンだけは無理じゃ。呼び出せる

が従えねばならん。あ奴は神クラスじゃし」

おいおい。

んじゃスコールとかは神を倒したのかよ……

「ま、まあ召喚して従わせたら大丈夫なんだろう？」

「うむ」

「ならそれでOKだ」

「わかった。ああ、それと召喚獣は死なないからの。死ぬほどのダメージを食らうと霊界に戻り回復するんじゃ。まあ数日で回復するの。それを待てなかったもう一度召喚するんじゃ。するとその召喚獣の霊石が現れるからそれに魔力を注ぎ込めば良い。普通の人物なら無理じゃがお前さんなら大丈夫じゃからの」

「あいよ」

ということとは、自分の鍛錬用にも使えるってことだな。  
なんて便利なんだ、召喚獣。

「最後、F a t e の正義の味方や赤い弓兵が使っている剣製の魔法」

「それは駄目じゃ」

「なんでだよっ!？」

何でこれが駄目なんだよ！

俺の夢なんだよ？

エクスカリバーッ！　って叫んでみたいんだよ！

「最近の転生者はそれが慢心王の能力ばかりでおもしろくないからの」

「そんな理由!？」

しかも最近のつてことは結構いるのか、転生者!?

「そんなにいないがの。ま、それ以外にするんじゃ」

「はぁ……ちょっと待ってくれ」

さてどうするか……

正直アレが断られるとは思ってもいなかったしな……  
むう……

「なら眼を二つくれないか？」

「眼……じゃと？」

眼と言えばやっぱりアレしかないだろ？  
だが俺は片目ずつ違うものを貰うがな！

「片目を“直死の魔眼”。もう片目を“劫の眼”《アイオンの眼》  
をくれ」

直死の魔眼は有名だが、劫の眼《アイオンの眼》は結構マイナー？  
まあどっちも反則級的能力持ちだがな！

「二つもか？」

「ああ。もちろん“劫の眼”《アイオンの眼》は死後の副作用はな  
くしてくれ」

何で眼に囚われなくちゃいけないんだよ。

「ちとキツいのう……」

「……なら制限をつけたらどうだ？」

「制限？」

どうしてもこの二つは欲しいからな。  
少しの制限はつけても大丈夫だ。

「直死の魔眼」は使用中は魔法の詠唱不可。“劫の眼”《アイオンの眼》は一日10分だけ発動可能。これでどうだ？」

これくらいなら許容範囲だ。  
どちらも別段問題にならない。

「それなら許可出来そうじゃな」

「よし！なら今まで上げた5つの願い事で頼む」

「了解した。転生の時期はいつごろがいいかの？」

「そうだな……」

やっぱりネギま！？に転生って言うたら大戦の時期だよな。  
テンプレだが気にするな！

「んじゃ大戦の時代で頼めるか？」

「わかった。それと、ほれ」

爺さんが俺に何か手渡す。

……ナイフ？

「やっぱり“直死の魔眼”持ちはこれじゃろb」

「なかなかわかってるじゃねえかb」

俺は爺さんと握手する。

やっぱりナイフだよな！

「そのナイフはこの次元に存在するありとあらゆる鉱石を使って作ったからの。どんな扱いをしても刃こぼれもしないし壊れもしないから存分に扱ってくれ」

「サンキュー！」

手に持って鞘から出して見ると、予想以上に手に馴染む。軽く振り回して見るが、なんら問題はない。

「それじゃ送るぞ。よい人生を送るんじゃないぞ」

「ああ。このナイフもありがとな」

「なに、礼には及ばんわい。後、サービスとしてナイフの扱いは体に継承させておくからの。では」

その言葉とともに、俺の目の前は白く光り輝いて見えなくなった。

## ブログ（後書き）

さて、初めての投稿なので何か不都合などがあればご連絡ください。  
感想など待ってます！



## 主人公設定（前書き）

後々増えていくので、たまに見てくれるとありがたいです。

基本的に今までなかった技能や魔法が出ると更新したと思ってくれて結構です。

たまに作者が更新するのを忘れるのでその度に連絡してくれたらうれしいですね。

後、作者の説明不足で「この魔法や技能がどういったものかわからない」というものがあれば連絡ください。

ここに載せますんで。

## 主人公設定

Name: ジングウ神宮 サダメ運命

実年齢: 16歳 (現在不老)

身長: 176cm (年齢を自由に変更可のためすぐに変わる)

体重: 63kg (同じく)

性別: 男

属性: 中庸・中立・混沌

二つ名: 【時空統べし帝王】 【神獣の長】 【漆黒を纏う者】 【銀色の英雄】 【一人軍隊】

【銀色の魔王】 敵対者から主に呼ばれる 【世界に喧嘩を売っても勝つだろう人物】

【バグキヤラを超えた人間】

詠唱キー: デウス・エクス・マギナ

容姿: 元は黒髪黒眼の日本人顔ただしイケメンだったが神に願い変えて貰った。現在には右目が“直死の魔眼”で左目が“却の眼”。それ以外はRAEのジークの髪を銀にした感じ。黒系統の服を好んで着る。流石は厨二w でも無駄に似合うw

ステータス: 筋力 A+ (EX)

魔力 EX

耐久 B (EX)

敏捷 A+ (EX)

幸運 EX (ギャグの場合はE)

宝具 EX

( ) は魔力 or 気で強化した場合。幸運のみ除外。

技能：・年齢変更（A）

文字通り。下は0歳、上は120歳くらいまでに変更可能。しかし、やりすぎるとそれが原因で死亡する可能性も。

・召喚（EX）

これも文字通りに、FFの召喚獣を召喚出来る。

しかし“エデン”だけは未だ使役不能。召喚し、契約をすれば使役可能。

・ナイフの扱い（A）

古今東西のナイフの扱いが体に継承されている。もちろんゲームなんかの技もあるぞ

・力の扱い（A）

古今東西あらゆる力（気力、魔力、妖力、霊力、神力、etc）を扱うことが出来る。

・神の境地（A）

神の魔法とされる“時間”と“空間”の魔法を不完全ながらも扱える。“時間”は未来や過去と言った時間移動と完全停止、“空間”は別次元への移動と言ったものは使えない。

まあ時間を掛ければ完全に掌握することが出来るかも？

宝具：・神獣召喚（EX）

歴代のFF召喚獣を召喚する。正直、これを出すだけで大抵の戦闘に勝てる。

召喚獣は死亡しても元居た世界に帰り復活する。また即座に復活させたい場合は、霊石を召喚して魔力を注ぎ込めばOK。

・直死の魔眼（EX）

型月主人公が持つ“直死の魔眼”と同じもの。運命は片目しか持っていないが効力は同等かと思いきや、片目に能力が集まっているので実際の型月主人公達よりも死の点、線が見える。

これが読み取って視覚する「死」とは単なる「生命活動の終了」ではなく、「死期」や「存在限界」を意味し、存在の寿命そのものである。「死」は黒い線と点で現れ、強度を持たない。この「死」を切ったり突くことでそのモノの寿命を断つと、あらゆるモノ（有機、無機を問わず、時にはより広義・上位概念上の存在も含む）を殺すことができる。「死の線」はモノの死に易いラインを表し、線をなぞり断てば本体が生きていようとその部分は「死亡」し、結果として対象はどんなに強靱であろうと切断される。「死の点」は死の線の源でもあり、寿命そのもの。死の点を突けばそのモノの意味が死に至る。

代償として、使用中は魔法詠唱不能。魔法の無詠唱は発動可能なのでそれほど痛手ではない。

・刳の眼《アイオンの眼》（EX）

1 e y e s の主人公が持っている最強の厨二眼。

自分が望む未来を数ある未来から手繰り寄せ実現させるという無茶苦茶な眼w

代償は一日に10分間しか発動出来ない。それでもなんら問題なし。

・神が創りしナイフ（B+）

神が選別変わりにくれたナイフ。

なんでもこの次元に存在する全ての鉱石を使って作ったとかで、刃こぼれや壊れる危険性が0。しかも切れ味が半端なく、軽い障壁くらいならスパッと切れる。

どうやらミスリルなんかも使われているらしく、魔法の伝達率や気の伝達率がおかしい。運命が使うと切れないものはないだろう。

何気に魔法発動媒体になる。しかも最上級の一品。

戦闘技術：・魔法技術

全属性の魔法を使用可能。苦手なものなし。得意なものも特になし。全部が得意。

・咸卦法

適当にやってみると出来たようだ。流石はチート仕様。基本的に戦闘の場合は使用。

・神卦法

咸卦法を発動する際、ただの魔力ではなく属性付きの魔力を合成し、発動する技法。特に、『燃える天空』などの最高難度の魔法を合成することによって、一時的に精霊神の領域に足を踏み込むことが出来る。闇の魔法、咸卦法より習得難度が高い究極技能。

・炎神化

神卦法において、『燃える天空』を合成した場合になる状態。炎の精霊神と同格で、炎属性の魔法は効力が2倍。相手からなどの炎属性の魔法を吸収し、自分の魔力に還元することが出来る。

・氷神化

神卦法において、『おわるせかい』を合成した場合になる状態。以下、炎神化と能力は同じ。属性だけ違う。

・雷神化

神卦法において、『千の雷』を合成した場合になる状態。以下、炎神化と能力は同じ。属性だけ違う。

魔法：・次元空間

空間を開いて単体でエヴァなどが持つ別荘などと同じ効果を及ぼす空間を作り出す。

普通に使えばただの空間だが、運命の“時間”の魔法を使えば、外と中の時間差も操ることが出来る。

現在最高で外の一時間に対して中は一カ月。

・守護結界

“空間”の魔法を利用して一つの膜を創りだす。それに魔力を注ぎ込むことで、普通の防御魔法や障壁より高い防御力を叩きだす、運命専用の魔法。

その強度はバハムートの“メガフレア”すら防ぎきる。（バハムート・烈の場合は罅割れ後破壊、バハムート・零式の場合は破壊される）

・夢と現実の狭間

“空間”の魔法を利用して、現実の位相をずらす魔法。理論上どんな攻撃も通らない。

運命の場合は“空間”の魔法は完全に習得出来ておらず、通常時では発動不能。

時間が経てば使用可能かも知れないが、現段階では“刳の眼”発動中で、成功する未来を手繰り寄せる以外は発動不能。

・始原の炎

“炎神”状態になっている時のみ発動可能な魔法。

その威力は『燃える天空』を軽く超え、擬似的な太陽を生み出す。

・始原の氷

『おわるせかい』は殆ど絶対零度に近い温度を出す、こちらは絶

対零度さえも凍ら  
してしまう。

発動すれば辺り一面は極寒など生易しい状態になる。

・始原の雷

神の雷と揶揄されてもおかしくない、極太の雷を射ち落とす。  
その雷は雷の召喚獣であるケツアクウアトルでも耐えきれない。

バクティオーカード  
仮契約

主：テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア

名前表記：サダメ ジングウ

称号：神に最も近き存在

色調：虹色

徳性：信仰

方位：中央

星辰性：恒星天

アーティファクト：テンナルセイハイ（天為る聖杯）

## 主人公設定（後書き）

最近気づいた。仮契約してたのに更新忘れていたことにw w



## 1話（前書き）

さて、続きを投下。

## 1話

さて、うまく転生出来たのか？

俺は冷静に物事を見る男だからな！

いつだって冷静に……冷静……れいせ

「　　なんで空中から出てくるんだよ！」

現在高度1万メートルくらいから落下中。

どう考えても地表にぶつかりお陀仏コース。

「ヤバイヤバイヤバイ………！」

原作に介入する前に死亡するって！

どうする！？　どうするよ、俺！？

「飛ぶ！？　どうやって飛ぶんだよ！？」

ヤバイ！

結構地表が近くなってきた！

「糞ッ！　もう適当に魔力かなんかを放出するしか……ッ！」

俺は呼吸を落ち着け、力を捻りだすようにする。

普通の人間なら出来ないだろうが、あいにく俺はチート仕様。  
体から溢れんばかりの魔力が放出される。

「これを………っと！」

地表に思いつきり放出。

地面にぶつかり、その時の風圧で落下速度が減速する。

ドスンッ！

「ふう、助かった……」

どうやら命からがら助かったようだ。

それにしてもあのジジイ……

最後の方は感謝してたって言うのに、この仕打ちかよ……  
いつか復讐してやる……

「誰だお前はッ！」

そんな光景を誰かが見ていたようだ。  
めんどくさ！

side ナギ

よお！ 俺が最強の魔法使いと呼ばれるナギ・スプリングフィール  
ドだ！

そんな俺は今戦争に介入してるんだぜ。

まあ俺や詠春、師匠やアルから勝つのがわかってるんだけどな！

「んで？ 次の目的地はどこなんだ？」  
「次はそうですね」

頭脳労働担当のアルに次の目的地を聞く。  
最近では戦線を転々を渡り歩いてるからな。  
そんな中、馬鹿げた魔力放出が近くで起こる。

な、何だ！？

「ッ！？ 何だ、この魔力は！？」  
「ふむ……馬鹿ナギの倍はあるのお」  
「ここら一帯には何もなかった筈ですが……」  
「敵か？」

どうやら俺の仲間全員あの馬鹿げた魔力に気付いたようだな。  
けど、なんだ？  
あの魔力は敵って感じがしないな……

「よし！ おもしろそうだから見に行こうぜ！」  
「ナギッ！ 敵かも知れんだから慎重にだな……」  
「詠春？ そんなことでは頭の毛が薄くなりますよ？」  
「余計なお世話だっ！」

外野がうるさいけど関係ねえ！  
おもしろそうなヤツなら仲間にする！  
これが俺の信条だぜ！

「おら、行くぞ！」  
「わかってますよ」  
「まあ大丈夫じゃろ」

「はぁ……」

俺達は全員高速で魔力を感知した場所に移動する。  
すると、一人の人物が眼に入った。

俺より高い身長。年齢はアルと同じくらいか？  
それに珍しい銀髪で、眼が右目が漆黒、左目が金色と珍しい容姿をしている。

何ておもしろそうな奴なんだ……！

俺は内心興奮しまくりながらそいつに近づいていく。  
そいつは一人でぶつぶつ言ってるが無視だ！

「誰だお前はッ！」

side out

たくっ……誰だよ、こんな場所で俺に声を掛けてくるのは……  
俺は上空1万メートルのパラシュート無しのスカイダイビングを行  
ったばかりだと言うのに……

そんな俺は不機嫌な顔を隠しながらもそいつらの方向に顔を向ける。

一人目、生意気そうな赤い髪のカキ。

二人目、優男そうだが腹黒そうな美男子。

三人目、何か苦勞人っぽい刀を持って眼鏡をかけている青年。  
四人目、最初のガキより小さい白髪の少年。

ん？

こいつらって……

「お前達こそ誰だよ？」

とりあえず内心は物凄く焦ってるが、俺の“秘儀 鉄面皮”を発動し悟られないようにする。  
てか、多分当たりだわ。  
魔力が馬鹿みたいに多いし。

「俺達か？ 俺達是最強の集団、紅き翼だ！ そして俺は最強の魔法使い、ナギ・スプリングフィールド様だぜ！」

おうwww

やっぱりかよw

「最強ってお前、？ かよ…… ww」

漫画読んで思ってたけど、ナギってまさしく？ だよなww  
まあこっちはそれ相応の力は持つてるけど。

「（??）私はアルビレオと言います。気軽にアルと呼んでください。……それであなは？」

むう……殺気を飛ばされてるんだが……

この二人でも後ろにいるゼクトでもないとなると……

「答えてもいいが、まず刀を持った人。殺気を飛ばすのを止めてくれ。危害を加える気を毛頭もない」

「す、すまない……」

流石は一番の常識人だな。

「気にするな。怪しいのは俺が一番わかってる。それで俺の名前だったな？ 俺の名前は神宮運命。運命と呼んでくれて構わない」

「私は近衛詠春。殺気を飛ばしてすまないな」

「僕はゼクトじゃ」

とりあえずは全員が自己紹介が終わる。

そして

「運命ッ！ 俺達の仲間にならないか？」

「イキナリだな、オイ」

まあそれの方が原作に介入しやすくなるからいいだが、こうもあっさりとは……

てか、コイツは怪しむという行動はしないのか？

「別にいいが……残りの奴らはいいのか？ 自分で言うっておいてなんだが、俺は物凄く怪しいと思うんだが……さっきだって一万メートル上空からパラシュート無しのスカイダイビングをしたばかりだしな」

ホントにあの糞神殺してえ……！

「……」

「ん？ どうした？」

何か急に黙ったんだが……

え？ もしかして一万メートルのくだりで引いたの？  
それだったら言わなかったら良かった！

「……聞いてもいいですか？」

「何だ？」

おお！

アルはちゃんと反応してくれたぜ！

「何故そんなことを？」

「……………」

いや、俺が好きでやったみたいに言うのを止めて！

俺は無理やりやらされたんだよ！

「知り合い（神）に無理やり転移（死後の世界から）させられたんだ……」

嘘は言っていないよな？ 本当の事も言っていないけど

「それはそれは……」

なんでお前はおかしそうな顔で見るんだよ！

普通は「可哀想に」とかじゃねえのかよ。

「ま、まあそれのおかげであんな場所に送られたんだ」



俺は上空を見上げる。

そこはムカツクくらいの雲一つない快晴だった。

「……どうやら嘘は言っていないようですし、信用してもよさそうですね？」

「俺はもともと仲間に入れるつもりだったけどな！」

「俺はかまわんぞい」

「はあ……まあ、こんなヤツらだ。気にする方が疲れるぞ？」

どうやら信用してもらえたみたいだ。

ま、これで介入出来そうだな。

「そうか。ならこれからよろしくな！」

＼side アル＼

魔力の着弾点には一人の青年が立っていました。

しかも、あれほどの魔力を放出した後だというのに、まったく疲れた様子を見せていません。

……彼もバグキャラですか。

そうすると彼もコチラに振りむきます。

その顔は無表情。

何の感情も持たない機械を連想させられます。

……ヤバいですかね。

そんな危惧をしている時にアチラから声が掛かります。

「お前達こそ誰だよ？」

どうやら一般常識くらいは持っているようです。

これが殺戮マシンみたいな人だったら私達は殺されていたかもしれませんね。

「俺達か？ 俺達是最強の集団、紅き翼だ！ そして俺は最強の魔法使い、ナギ・スプリングフィールド様だぜ！」

何で貴方はそんなに樂觀的なんですか……

「最強つてお前、？ かよ…… ww」

その言葉に彼は反応します。

？……？

そう思いましたが私は気を取り直して情報を集めることにします。

この中では私がこういうのを担当していますし、私自身もこの人間の情報が欲しいですし。

「私はアルビレオと言います。気軽にアルと呼んでください。……それであなたは？」

「答えてもいいが、まず刀を持った人。殺気を飛ばすのを止めてくれ。危害を加える気を毛頭もない」

詠春……あなたっていう人は……

これじゃあ攻撃されても文句は言えないじゃないですか。

しかし、危害を加える気はないんですか……

信用出来るか分かりませんが。

「す、すまない……」

「気にするな。怪しいのは俺が一番わかってる。それで俺の名前だったな？　俺の名前は神宮運命。運命と呼んでくれて構わない」

どうやら無感情と思っていましたが、それは間違いのようです。ちゃんとこちらが対応すれば対応してくれます。

最初は警戒されていた……ということですね。

まあそれも仕方ないことですね。

こちらも警戒していましたし。

「私は近衛詠春。殺気を飛ばしてすまないな」

「僕はゼクトじゃ」

残りも二人も自己紹介をします。

「運命ッ！　俺達の仲間にならないか？」

「イキナリだな、オイ」

本当にイキナリですね。

しかも彼にもツッコまれていますよ、ナギ？

「別にいいが……残りの奴らはいいいのか？　自分で言うておいてなんだが、俺は物凄く怪しいと思うんだが……さっきだって一万メー

トル上空からパラシュート無しのスカイダイビングをしたばかりだしな」

「……」

「ん？ どうした？」

どうしたって……

普通はこの反応が普通でしょう？

何で一萬メートル上空からパラシュート無しのスカイダイビングをしているんですか。

「……聞いてもいいですか？」

「何だ？」

どうやら答えてくれるようです。

「何故そんなことを？」

「……」

何か暗い事情でもあるんでしょうか。

まあ事情無しあんなことはしないでしょから、あるんでしょうね。

「知り合いに無理やり転移させられたんだ……」

「それはそれは……」

……どうやら予想以上におもしろい人物のようです。

これは危害を加えないというのも信用出来そうですね。それに私も彼を仲間に入れたと思いますし。

「ま、まあそれのおかげであんな場所に送られたんだ」

そう言つて彼は上空を見上げます。

……それにしても彼に何があつたんでしょうか。

他の人をどこかに送る魔法なんて私やナギなどの最高クラスの人間しか扱えませんし。

「……どうやら嘘は言つてないようですし、信用してもよさそうですよ?」

「俺はもともと仲間に入れるつもりだったけどな!」

「儂はかまわんぞい」

「はあ……まあ、こんなヤツらだ。気にする方が疲れるぞ?」

私の言葉で他の人も納得したようです。

彼もそんな様子を見て、少し考えた後に答えてくれます。

「そうか。ならこれからよろしくな!」

どうやらこれからおもしろくなりそうです。

## 1話（後書き）

なんか主人公の口調が安定しない。

まあ、その場のノリで喋ってると思うてください（汗

## 2話（前書き）

最近、朝寝て夜起きるという生活サイクルになってる。  
ヤヴェエ W

## 2話

「何？ お主魔法が使えぬのか？」

あれから数日、俺はナギ達と一緒に行動している。  
まあ仲間になったから当たり前なんだけど。

「ん？ 何かおかしいか？」

「それはそうでしょう。あれほどの魔力を持っているというのに魔法が使えないなんて驚きですよ？」

そう言うなよアル。

俺は数日前まで一般人だったんだから。  
使えるわけないだろ？

「それなら何か使えるのか？」

ナギは興味津津といった感じに問いかけてくる。

「んゝ、使えるって言ったら……」

そう言っ取り出すのは神から餞別として貰ったナイフ。  
やはりよく手に馴染む。

「ナイフ？」

「最高質のナイフだぜ？」

流石は刃物。

刃物好きな詠春がガン見してくるんですけどw



「それ……」

「どうした？」

「何気に魔法発動媒体にもなるようじゃの。そのナイフだけでも物凄い魔力が漂っておるぞ」

マジで？

俺もよく眼を凝らして見る。

すると、予想外な程の魔力がこのナイフには溢れていた。

神よ、お前は物凄いものを渡したんだな。

「あとは……」

そうだな……

あと使えるって言ったら

“直死の魔眼”

却下。危ないしこれは完全に俺の切り札だし。

“却の眼”

却下。これは切り札なんて生易しいものじゃなくてジョーカーだろ。

“召喚獣”

これかね。

そう思っただけ俺はナギ達を下がらせる。

ナギ達は？とした顔をしていたが、無理やり下がらせた。

誰を呼んでみようかな……

バハムートは呼んでみたいけど、最初の召喚だしもっとランクの低い奴を呼ぶかね。

「来い！ “ケツアクウアトル”！」

俺の声に応じて召喚獣が呼び出される。

……デカイな。

最初の召喚の感想がこれ。  
でもホントにデカイんだよ？

「な、何だコレ……」

「こ奴の魔力でさえナギよりも下だが、それでも大きすぎるじやろ」  
「バグキャラですね」

「……………」

やはりと言つべきか、仲間全員が引いている。

「おい、運命！ コイツと勝負してもいいか!？」

訂正。一人は興奮していたようだ。

「別にいいが、一発だけだぞ？」

「よっしゃ！」

ガッツポーズを取るナギ。

そんなにうれしかったのか、即座に詠唱に入る。  
ちよい待て！

「百重千重と重なりて 走れよ稲妻！」

緊急退避iiiiiiiiii！

ナギを除いた俺達は高速でその場から離脱する。

あの馬鹿！

俺達が離れてから詠唱しろよ！

「千の雷」！」

「もうちょい手加減しやがれッ！ “サンダーストーム”」

ナギの“千の雷”とケツアクウアトルの“サンダーストーム”がぶつかり合う。

互いの雷は互いを削り合い、消滅し合った。

「おいおい……あの馬鹿の魔法はどういう威力してんだよ……」

「それならあなたも似たようなものですよ。どうやったらアレを役出来るんですか」

「それにしても凄まじいのお」

俺はケツアクウアトルを還し、ナギに近づいていく。

「アイツスゲエな！ また戦ってもいいか！？」

「また今度な……」

なんでそんなに好戦的なの？  
戦闘狂なの？

それとも馬鹿なの？

「ま、これが俺の戦力かな」

「なるほど」

「まあ十分じゃないのか？」

そうは言うがな詠春。

正直これだけでも生き残れる気がしないのだが？

明らかにナギなんか俺の召喚獣達に勝てるぞ？

まあ数で押せば大丈夫だろうが。

「ふむ。なら儂が魔法を教えてやろうか？ その馬鹿弟子は物覚えが悪くておもしろくなかったからの」

「あ、酷えや師匠」

「いいのか？」

マジで教えてくれるの？

願ったり叶ったりだよ。

「ああ。どうせやることも余らないしの」

「んじゃお願いする」

あれから一週間。

やはりあなたはバグキャラでしたね、とはアルの言葉。

やはり俺はチート仕様らしいw

一週間で“千の雷”や“燃える天空”といった最上級の魔法を覚えた。

しかも苦手属性もなく、全てを扱えるという鬼仕様w

「お主はバグキャラ過ぎておもしろくなかったの……」  
「何かゴメン……」

何故か謝る俺。

別に謝らなくてもいいかもしれないが、何故かそうしなくてはいけないと思った。

「そう言えば……」

俺って“時間”と“空間”の魔法使えるんだよね？

今しがた、神に願った一つを思い出す。

一度使ってみるか。

俺は精神を集中させる。

好都合に師匠（俺もこう呼ぶことにした）もナギ達の方に行って近くに誰もいないことだし。

「ん、でもどうやってやんだろ……」

確かに使えるようにはしてもらったけど、具体的なことは聞いてな  
くね？

職務怠慢にも程があるぞ、あの神め。

「ま、適当に“アクセラレーション”」

ん？

何か周りがおかしいような……

俺は一步踏み出す。

そうすると予想以上の速度で俺の体が動く。

出来たな……

なんか適当にやったら出来るって虚しいな……

“空間”も適当にしたら出来るのかね……

俺はもう自棄になりながら魔法を唱える。と思ったのだが……

「“空間”ってなんだよ……」

大問題発生。

「よくよく考えたら“空間”の定義って曖昧すぎたな……」

どうしよう

「あ！あれでよくね？」

俺はネギま！？の世界で一番空間っぽいものを思い出した。

あれは確かに“空間”だ。

しかも“時間”も使ってるっぽいし。

「エヴァが持つてる別荘を魔法で再現でいつか」

思い立ったが吉日。

俺は早速魔法を唱える。

「“次元空間”」

それと同時に人が通れるくらいの穴が現れる。  
その中に俺は恐れずに入っていく。

「何もないな……」

中は何もない、ただの真っ白い空間だった。  
広さはどうやら無駄に広いようで、端が見えない。

「ま、成功かな。中にはまた何か持ってくるか」

そして俺は空間から抜け出す。

抜けだした先は何故かナギ達がいる場所。

「うおっ!？」

「何をしているんですか？」

「お主は本当によくわからんの」

「まあ何でもいいんじゃないの？」

「お前ら……」

何で俺はこうもぼろ糞に言われなくちゃならないんだ。  
ホントこいつらは俺の仲間なんだろうか？

## 2話（後書き）

一日で10000PV近くとは……  
流石はネギま！？ですねw

感想など待ってます。



### 3話（前書き）

おもしろそうなMMO見つけたのに評価が馬鹿みたいに悪い……  
テンションが激減した……

### 3話

「んっふっふ」。こいつが旧世界は日本の鍋料理って奴かあ」  
「お、いい感じじゃないか」

久しぶりの日本料理か。  
これはヨダレが出るな！

「じゃ、早速肉を」

「あっ」

「もつと投下しろ、ナギ」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

「ナギ、おまつ！？ 何肉を先に入れてるんだよ！」

なんか詠春が叫んでるなw  
んなこと気にすんなよ。

「いいじゃねえか旨いもんから先でよ。ホラホラ」

「ナギ、全部入れてやれ！」

「任せろ！」

「バツ、バカツ！ 火の通る時間差というものがあってだな！ ま  
ずは野菜を入れて…あーちよッ！」

「あー、うつせ！ うつせーぞえーしゅん！」

「そつだそつだ！」

「フフ……詠春、知っていますよ？ 日本では貴方のような者を

」

何だ？

アルよ、何を知っているんだ……？

「【鍋將軍】と呼び習わすそうですね？」

「鍋將軍！？」「

「っ、強そうじゃな」

な…なんだと……！？

詠春が彼の有名な【鍋將軍】の名を持っているとはな……

「わかったよ、詠春。俺達の負けだ、今日からお前が鍋將軍だ」

「まさか詠春がその名を持っているとは……」

「全て任す。好きにするが良い」

「んー……うれしくないなー」

ここは譲っておくさ、詠春。

流石に俺も鍋將軍には敵わないからな……

「おお、何じゃ！？ このソースうまいぞ？」

「ホントだ！ うめえっ！？」

「やっべえな、食が進む進む」

醤油とか久しぶりすぎるw

こっちじゃパンとかが多いし。

「これこそ日本が誇る醤油だよ」

「それに大根おろしですね」

「これが醤油か！ スゲエうめえっ！」

てか何でアルが大根おろしを知ってるんだよ。

しかも【鍋將軍】なんて言葉を知っていたし……

さてはアルめ……日本マニアだなっ！？

「姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子ちゃ……？ ああ、オスティアの姫御子のことじゃな？」

「惚れたか？」

「バカッ！ そんな年齢でもねえだろうが！」

「フフッ……まあ戦が終われば、彼女を自由にする機会も掴めるやも……です」

まあ現実にはそう簡単に行かないわけだが。

しかし急にシリアス展開に入ったな……

そういやこの後に本家バグキャラが来るんだったか？

「その戦争だが……やはりどうにも不自然に思えてならん」

「だが詠春。戦争に自然なんてものはないぞ？ 戦争は老害共が引き起こす旗迷惑なものと相場が決まってるからな」

「それはそうだが……」

「何が？」

「何もかもだよ。お前が言いだしたんだろうが、鳥頭。肉ばっか食うな」

ホントにナギって馬鹿だよな。

まあその分一直線に自分を貫ける強さを持つてるから俺も付いていくんだが。

ッ！？

来たかッ！

遙か上空から殺気と共に剛剣が飛んできた。

俺達はそれを避けるために立ちあがる。

ドガンツ！  
バsshャーン！

ああ！  
鍋が零れる！

ひよいひよい  
パシパシ

危なかった……  
危うくこぼしてしまうところだった……

俺、ナギ、アル、師匠は飛び散った鍋の具材を危なげなく取る。  
そんな中、馬鹿みたいに剣を飛ばしてきた奴が、馬鹿みたいに大声で話します。

「食事中失礼……ッ！ 俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！」  
食事中ってわかってんなら来るなよ……

「いっちょやろうぜッ！」

主語が抜けて意味が通じねえよ……

「何じゃ？ あのバカは」  
「帝国のつて訳じゃなさそーだな」  
「さあ？ ただの馬鹿だろ」

まあ知っているけどな！  
でも見た感じたただの馬鹿には違いない。

「えいしゅ…おう!？」

「フ…フフフフ……」

詠春……頭から鍋かかってるよ。

しかもキレてるし……

「フ…食べ物を粗末にする者は」

「どーしたー! 来ねーのかぁー! 来ねーならこっちから」

詠春が突っ込んでいったか。

「いッ……!？」

早いな。

しかも斬鉄かよ……

「おほ!」

「斬る」

おお、どうやら戦闘が始まったようだ。

俺は観戦しながら鍋の残りを食べていく。

周りも同じ雰囲気になっていた。

「お? 詠春の攻撃凄いでるぜ」

「あの大男やりますよ。見たことがあります」

「なかなか強いな」

「どこの誰じゃ?」

名前もさつき言っただけじゃねえか、師匠。  
ついにボケたか……

ドンッ！

「危なッ！？ 何すんだよ、師匠」

「お主、不謹慎なこと考えたじやろ」

「……んなことねえよ」

危ない危ない……

何でわかつたんだよ。

ニュータイプか何かですか？

「ちょっと前、南で話題になった剣闘士ですよ」

「ふん……」

えらくやる気ないのな。

「ちよっ！ タンマタンマ！ あんたマジで強えな！ ちょい待たね？」

「ふざけるなっ！ やる気なら本気を出せ、貴様ッ！」

「へっ、そースカ。けど5対1だし本気を出す訳にはいかんのよね。  
あんた達の情報はリサーチ済みだぜっ！？」

ん？

何か投げたぞ？

「ブッ！？」

「情報その1、生真面目剣士はお色気に弱い」

えー……

あれでもしかして負けるの？  
正直ダサいんですけどw

「くっ…卑劣な……。いや、何のこれしき！ 心頭滅却すれば火も  
また…」

ゴンッ！

「フツ。ホイ、一丁あがり」

うわ……

本当に負けたよ……

これって詠春との対応を考え直した方がいいのか？  
ってあれ？

ナギは？

「ッ！？ ぬんっ！」

ゴガアンッ！

おいおい……

何時の間に突っ込んでるんだよ、あの馬鹿は……

「おう。出たな情報その4、赤毛の魔法使いは弱点なし。特徴  
無敵」

特徴が無敵ってww  
もうちょい他の特徴はなかったのか、情報屋w



「てめえら！ 手エ出すなよ！」

「言われずとも」

「バカの相手はバカにさせるのが一番じゃ」

「ナギが負けたら俺が後釜に行つてやるから心配すんな」

いざとなつたら召喚獣を数体出してフルボッコだZE

「奇遇だな小僧。俺も南じゃ無敵と滅法噂の男だ」

「へっ、おっさん。いいのかよ、剣なしで」

「心配すんな。俺は素手の方が強え」

気と魔力の収縮が半端ないな……

あれじゃ明らかに地形が変わるだろうな。

一応俺達の周りだけに障壁を立てておくか。

「 守護結界」

俺は“空間”の魔法を利用し、自分の魔力と空間の魔法で結界を張る。

この魔法は俺のオリジナルで、最大にするとナギの“千の雷”はおろか、バハムートの“メガフレア”すら防ぐ最強の防御魔法だ。

「何時見ても貴方の魔法は不思議ですよね」

「単独で“時間”と“空間”の魔法系統を使えるのは主だけじゃろ  
うしな」

「ま、気にするなよ。お？ 始まるみたいだぜ？」

「はッ」

「フン」

そして激突。

最初はナギの右にカウンターでラカンも合わせてきた。

「はっ！」

「へっ！」

さっきからお前らそれしか喋ってねえよ……

お！ ナギが分身の術を使っ たな。

「うおっ！ たくさん！？ ニンジャかよ……うーんと、めんどく  
せつ。ぬふんっ！」

えらく適当に粉碎したな。

しかも例えが忍者って……何だ？ そんなに日本は有名なのか？  
あ、ナギがあんちょこ見て詠唱してら。

「百重千重と重なりて 走れよ稲妻」

「大呪文かッ！ 気合防御！」

「“千の雷”！」

おいおい……

ナギの“千の雷”を気合だけで防御しやがったぞ……

なんという無茶苦茶……

それから13時間も懸けて、辺りを焦土に変えながら戦った訳だが、結局は決着が着かなかった。

もう朝日が出てきたよ……眠い。

「フ…フフ……やるじゃねえか小僧」

「あんたこそな」

なんか友情みたいなの芽生えてない？ あの二人。

まあ拳で殴り合ってたからわかるけど。

「いや、5対1で挑んでおいてこの様じゃ……俺の完敗か」

いや、勝てる筈がないだろうww

「俺は……俺に並ぶ人間が運命以外にいたってだけで満足だぜ」

「運命？ ああ、あの銀髪か？」

「そうそう。あいつって俺と同じくらい強いんだぜ？」

「マジかよ。挑んでみたいな……」

なんでナギはそこで俺の名前を出すかね。

「いつかりベンジすんぞ！ 必ず決着……つけてやる……ぜえっ！」

生まれたての小鹿みたいにプルプルしてらww

「おおー、いつでも……こいや、筋肉ダルマあ。戦争やってるより  
気が晴れらあな」

「クスクス」

「気に入ったんだろ」

「止めを刺せばよいのじゃ」

「師匠って何気に酷いよな」

それから数日後、何故かラカンが俺達の下に来て仲間に加えて欲しいと言ってきた。

いきなり来た時は驚いたけどなw

理由を聞くと「お前達といたら強くなれそうだし、そこにいるヤツとも戦ってみたいしな」ということ。

しかもヤツとは俺のこと。まったくメンドクサイ……

そう言いつつも、まあ仲良くなってジャックと呼ぶようになったし？  
なんだかんだでジャックとの喧嘩は楽しかったし？ 拳と魔法しか  
使わなかったけど。

どうやら肉弾戦でもチート仕様らしいな、俺。

### 3 話（後書き）

緊急告知？w w

運命のアーティファクトが決まりません（爆

ということ、名前、能力等を募集したいと思います。

感想またはメールでアーティファクトの説明を送ってくださいと、

作者は狂喜乱舞して喜びますw

感想なども受け付けていますので、ドシドシ？連絡ください。

## 4 話（前書き）

宿題しなきゃ……

## 4 話

「んで？ 今日の戦いはこれか？」

俺は眼前に広がる戦艦などを見つめアルに問いかける。  
どんだけいるんだよ。しかも鬼神兵もいるし。

「そうですね。どうやら今回は奪還戦らしいですよ？」

「俺様達を辺境に追いやった罰だろ？」

「違えねえ」

「だな」

俺、ジャック、ナギが笑いだす。

俺達の活躍が気に入らない老害共の顔を思い浮かべる。  
どうせ今頃は苦い顔してんだろうな。

「それにしても数が多いな……」

「まあ関係ないじゃろ」

「そうそう。俺達是最強の集団“紅き翼”だぜ？」

「なら一発デカい祝砲を上げていくか！？」

やっと思えるぜ！

俺は今まで出したかった召喚獣を呼びだす。

「出でよ！ “バハムート”！」

「おいおい……」

「また凄いのがいたもんじゃのう」

「流石はバグキャラ」

「おい運命！ あとでソイツと戦わせろよ！」

後方がうるさい。

しかもまたかジャック！

「まあ気にするな。ドデカイ一発をくれてやれ！ “メガフレア”  
！」

竜王の口から吐き出される獄炎。

竜種の中でも最強とまで呼ばれるバハムートの一撃。  
それだけで相手の戦線は崩壊する。

「それじゃ行くぜ、野郎ども！ 突撃だ！」

「よっしゃ！ 今日も戦艦を切り落とすぜ！」

「バハムート！ 適当に敵を蹴散らして来い！ 俺も行くぜ！」

「元気ですね〜」

「はあ……頭が痛い」

「馬鹿なヤツらじゃ」

あれからまた日が数ヶ月単位で進んだw

あれからすぐにガトウとタカミチが仲間になったぜ。  
んでガトウが咸卦法使ってたから教えて貰ったぜ！

「気と魔力を融合させる感じでな」

「適当でいいんじゃない？」

俺適当。



ガトウ啞然。

周り爆笑。

俺も爆笑。

「出来たぜww」

「流石は元祖バグキャラですね」

「これって一応究極技法……」

「師匠……」

こんな感じで仲良く？ なったぜww

んでナギや俺のファンクラブが出来たらしい。

しかも会員人数は同格らしいw

それと同時に俺にも二つ名がついたらしい。

まず【神獣の長】。まあ召喚獣から来たんだろうな。まあ許容範囲内だろ。

次に【漆黒を纏う者】。うん、これも俺の服装だろう。いつも黒い服来てるし？

んで【銀色の英雄】。髪の毛とかから来てるんだろうが、英雄って柄じゃないんだがな。

そして【一人軍隊】。何か間違ってるくね？ 確かに召喚獣とか使ったら軍隊かも知れないけどさ。

それで一番こういう二つ名をつけてる奴が凄えと思った名前が

「【時空統べし帝王】ねえ……」

「間違いではないですけどね。唯一単身で“時間”や“空間”の魔法を使ってるんですから」

「まあ俺もこれはいいと思うよ？ けど」

確かに間違ってるぞ？

時間の“時”と空間の“空”を合わせたら“時空”だしな。  
だが

「【世界に喧嘩を売っても勝つだろう人物】とか【バグキャラを超えた人間】って何だよ！？ もう人間じゃねえじゃんかよ！」

「……………」

「え？ 何で皆黙ってるの？ もしかしてお前らも思ってるの？」

「……………」

「なあ！ 何か言ってくれなきゃ心配なんですけど！」

コイツらは仲間と思って本当に大丈夫なのか？

心配になって来た……

「ま、まあいいじゃないか……」

「そうそう。お前はお前だ」

「詠春、ガトウ……………」

お前ら……

「そうですけど【銀色の魔王】とまで呼ばれてますけどね？」

「グハッ！」

そう。

何か知らないけど敵対者からはそう呼ばれてるんだ。

どこの厨二だよ……

なんか【銀色の英雄】と対比しちゃってるよ……

「それはあなたが結界を張って誰も抜けだせないようにしてから“燃える天空”やら“おわるせかい”などを連発するからでしょう？ そんな風景見たら誰だってそう思うでしょう」

俺が悪いの？

敵は逃したら駄目だと思ってそうしたんですけど。

「戦艦の破壊率や戦線崩壊率はナギやジャックには劣るじゃろうが  
敵殲滅率ならお主が一番じゃろうしな」

「運命……」

そんな眼で俺を見るな！

見ないでくれ！

「何だよガトウ。わざわざ本国首都まで呼び出してさ」

「俺なんか昼寝しようと思ってたんだぞ？」

そういやここでアリカ姫との遭遇イベントだったけ？  
眠いのになあ……

「あつてほしい人がいる。協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

そうして奥から出てくるのは

「マクギル元老院議員！？」

「いや、儂ちゃう」

違うのかいっ！

まあ知ってるけどさ。

なら何で出てくんだよ。

「主賓はあちらのお方だ」

今度こそ本命の人物が現れる。

カッカッカッ

「ウエスペルタティア王国

アリカ王女」

「……………」

「ん！」

「へえ……………」

漫画よりもやっぱり全然美人だわ。

金の髪が夕日で輝いてら。

「ワハハハハ！ 上手い事やりやがってこんガキヤ！」

「ああ！？ 何の話だ！？」

何かジャックとナギが言い合ってら……………無視するけど。

あ、おいアル。俺のジューズ取るなよ。

「とぼけんじゃねーよ。お姫様とイチヤイチャキヤイキヤイおしや

べりしてたろーがッ！」

「してねっつの！ 何がイチャイチャだバカ！」

何時の時代の言葉だよ……

おい、師匠も俺のジューズ飲むなつて。

ちゃんと自分の分くらい取ってこいよ。

「なーに言ってんだよ。俺なんか」

そっぴやジャックはぼろ糞に言われてたな。

俺と師匠は後ろで爆笑してたけど。

「『気安く話しかけるな、この下衆が』だぜ……？ ……いや、ありやイイ女だぜ。一本芯の通ったな」

「頭大丈夫かジャック？ マゾかアンタ？ 俺あ、あんなおつかねえ女見たコトねえぞ」

俺もいい女だとは思うがな。

あれほど自分を通せる女は滅多にいないだろうし。

ま、場所がそうせざるを得ない性格にしたかも知んねえけどな。

「グハハハハ！ そーゆートコはまだまだカワイイガキなんだよてめーはよ」

「んっだそりゃ。意味わかんねえ…触んなっつーの！ 勝負すつか、てめ」

「仲いいな」

詠春もそんなとこいないで俺達と一緒に飲めばいいのに。

どうせ自分にはいい女が出来ないとか嘆いて黄昏てんだろっけどなw

「要するに戦争やりたいやつがいるんだろ？　まーた“あいつら”か！？」

「【完全なる世界】……帝国、連合だけでなく、歴史と伝統のオスティア内部までシンパがいるようだ」

とうとう出ました【完全なる世界】。

まあ前々から噂くらいには出てたんだが、最近になって大分とはつきりしてきた。

俺は知ってるけど口には出来ないしね。

未来を知っても役に立たないんだわ。

まあ本当に未来通りに進むかわかんないけどな。

もう俺という“イレギュラー”というものが存在してるわけだし。

だからあんまり樂觀視出来ない状況でさあ。

「世界全てが彼らに操られているようです……。これは思ったより根が深い……」

「んで？　俺達でその調査をやるのか？」

「そうですね。まあナギやジャックは向いていないので外れてもらいます」

www

向いていないだってよw

まあ俺もそう思っけどw

それにナギにはアリカ姫の御守を頼まないといけないしな。

「んじゃガトウとタカミチはともかく、それに加えて俺、アル、詠春、それに師匠も行くのか？」

「そうなります」

「うへえ……」

めんどくせえなあ……

調査とか俺の仕事じゃないだろ？

「人数がいるんですから仕方ないでしょう？」

「はいはい……んじゃ早速集めますか」

そうしてめんどくさい仕事が始まったわけだ。

「……で、貴様は一昼夜アリカ王女殿下を連れまわした挙げ句、その敵本拠地とやらを壊滅させてきたのか！　どういう夜遊びだそれは！」

「まあ……後は警察に任せてきたけど」

「セコイぞナギ！　俺も暴れたかったのに！」

「運命ッ！」

そう言ったって、俺だってストレス発散に暴れないとやっていけないんだよ。

今度ジャックと喧嘩でもしようかな。

「敵の下部組織を潰しても意味はないっ！　何のために秘密裏に調査してると……大体、万が一王女殿下にお怪我でもあったらどうする気だ！」

「姫さんノリノリだったぜー？　楽しかったー、とかって」

「ああ、言いそうだな。あの姫さんなら」

絶対言うよな。あの姫さんの性格だったらそんな感じだろ。  
冷血かと思いきや、天然発言もするみたいだし。

「嘘をつけっ！　どうせ貴様が無理やり連れまわしたんだろう！」

姫にこんなご迷惑をおかけするとはどういうお詫びすればよいか  
国際問題級の……」

「詠春さーん」

「お？　タカミチと師匠が戻って来たみたいだぜ？」

どうしたんだ？

あんな声を出して。

「あのコワイ冷血お姫様が今廊下で僕に向かってニッコリ…僕ビッ



クリしちゃって……あ、なんかナギさんにお礼を伝えて、だそうです。確かに笑いましたよねっ？」

「うむ。驚いたのじゃ」

へえ、珍しいこともあるもんだ。

それにしてもタカミチ。

いくらなんでもコワイ冷血お姫様は言い過ぎだろ。

「ッ……」

「くつくつ」

「な？」

ウケルww

マジウケルんですけどww

詠春の顔が物凄いことにw

「それに」

ん？

ナギが何か紙を取りだしたぞ？

「ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

「な……」

おお！

やるじゃねえか！

これでメンドクサイ調査なんかともおさらばだな！

さて、ここでフェイトと初めてのご対面か……

「マクギル元老院議員」

「御苦労。証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ……法務官はまだいらっしやいませんか」

こいつに変装してるらしいけど……わからんw

「法務官は……来られぬことになった」

「……ハ……？」

ガトウさん啞然。

どうやら偽物っぽいし、攻撃しますか！

「あれから「いつぺん死んどけ！ “深淵なる業火”！」ッ！？」

とりあえず先制攻撃成功！

これだけじゃ死んでないだろうが、ま、いいだろ。

「「な……！？」」

ガトウ、ジャックは啞然とするが無視。

ナギも目星がついていたようだな。

「ナイスだ運命！」

「ちょ　っ！？　運命おまつ……何やってんだよッ！」

「元老院議員の頭いきなり燃やしてよかったのか？」

「バ　力。よく見てみなおっさん、ジャック」

「何っ……?」

俺が放った業火の中から現れるのは白髪青年。  
チッ!

わかってはいたが無傷とはム力つくな!

「……よくわかったね【時空統べし帝王】、【千の呪文の男】。いや、彼の方は【銀色の魔王】と呼ぶべきかな?」

「どっちでも関係ねえよ。俺は俺だ」

「そうか」

「本物のマクギル元老院議員はどこにやった?」

俺達全員は臨戦態勢に移る。

相手は最強クラス。

本気でやらなきゃ俺達が死ぬ。

「もちろん既にメガ口湾の底だよ」

「てめえっ!」

「ナギッ!」

ナギが白髪に突撃するが、左右から一人づつ人間が現れる。  
よくわからないが水と炎の使い手みたいだ。

「通しませんよ」

「くらえ」

なかなかえげつい攻撃をナギに放つ。

……まああれくらいじゃダメージはないだろう。

「強えぞやつら!」

案の定無傷で俺達の前に姿を現した。  
フードが焦げるとかはあってもいいだろうに。

「ハッハ！　だが生身の敵だ。政治家だ何だとガチ勝負出来ない敵に比べりゃ万倍！　戦いやすいぜッ！」  
「久しぶりに暴れるかッ！」

そんな様子の中、フェイトは余裕の態度を見せる。  
……この後はどんな展開だっけか？  
転生して結構な日にちが経ったから、ネギま！？の展開を忘れてきてるな……

「フ……」

鼻で笑って手に持つのは……通信機！  
あれかッ！

「通信はさせね「通しません！」チッ！」

俺は水を操っている男に行き先を封じられる。  
クソッ！

メンドクサイことになるじゃねえか！

「わ、儂だ！　マクギル元老院議員だ……　うむ、反逆者だッ！  
ああ、うむ、確かだ。奴らに暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼むッ！スプリングフィールド、ラカン、ヴァンテンヴァーグ、ジングウ。奴らは帝国のスパイだった！　奴らの仲間もだ！　今も狙われている、軍に連絡を……」  
「げー！」

「やられたな」

「糞がッ！　ここで叩き潰す！」

「君達は少しやりすぎたようだよ。悪いが退場してもらおう」

結局倒すことが出来なくて、俺達は反逆者になっちまった。

「昨日までの英雄呼ばわりが一転、反逆者か。ヌッフ、いいねえ。  
人生は波乱万丈でなくっちゃな」

「タカミチ君は脱出出来たかな」  
「めんどくせえ……」

そんな中、ナギだけは何か心配するような顔でいる。

「どうした？」

「……姫さんがやべえな」

## 5話

フェイトにより逃亡生活を余議なくされてからすぐに、姫さんは捕まっちゃった。

俺達も助けに行きたかったが、直ぐ様の行動は危険ということで、数日間は隠れて過ごしていた。

「んで、場所は確認出来たのか？」

「ええ。どうやら“夜の迷宮”という建物の一角にある牢の中に入られているようです」

「んじやとつと行こうぜ！」

「まあ待てナギ。作戦というものをだな……」

「そんなことしてる間にも姫さんが危険かも知れねえだろうがッ！」

「……はあ。わかったわかった」

ナギも姫さんのことになると熱くなるな。

これはもしや恋が芽生えたかね？

「ま、場所もわかった事だし早く行こうぜ？　アリカ姫を取り返し

て早くこの掘立小屋から抜け出したいし」

「そうじゃな。儂もここは嫌じゃ」

「なら俺とタカミチはここで見張りをしているから早く助けて来い」

えゝ、セコくね？

ガトウ働きたくないのかよ？

二トでも目指してるのかよ？

「人聞きの悪いことを言うな。……もう少し情報を集めたいからな」  
「わかりました。それではアリカ姫奪還のメンバーはガトウとタカ

「ミチ君を除いた全員ということだ」

「おっしゃ！ 早く行くぞ！」

「無駄に元気だな……」

「よお来たぜ、姫さん」

「遅いぞ我が騎士」

おおっww

捕まってるっていうのにこの態度は変わらないとは。

流石だね。

あれから新幹線もビックリの速度で俺達は姫さんが捕まっている建物に侵入＆攻撃を仕掛けて救出に成功。

ついでに一緒に捕まっていたテオドラ（ロリver）も救出完了だぜ。

俺はその場にいないで外で残党を殲滅してたから会ってはないけどな！

「何だ、これが噂の“紅き翼”の秘密基地か！ どんな所かと思えば 掘立小屋ではないか！」

お！ あれがテオドラか。

なかなかいいいなw

しかし掘立小屋とは直球だな。俺もそう思うけどw

「逃亡者に何期待してんだ、このジャリはよ」

「そう言つてやるなジャック。まだチミッコだ、そこらへんの区別がわかってないんだろ」

「何だ貴様ら無礼であろう！」

まあ無礼かも知れんが気にすんな！

俺は気にしないから。

「へっへん。生憎ヘラスの皇族にや貸しはあつても借りはないんでね」

ジャックよ……

お前も子供っぽいぞ。同類か？

え？ しかもそれでどっか行くの？

これどうすんの？

俺が対処するの？

「そっちのお主は何なんなのじゃ！ 結局ヤツも名前を明かさなかつたしの」

「ん、俺か？ 俺は神宮運命だ。んでさっきの筋肉馬鹿がジャック・ラカンだ」

「何っ！？ 主が【時空統べし帝王】や【神獣の長】なのか！？」

「おうともさっ！」

やっぱりその名前は恥ずかしいんだけど……



「こんなひょつろちい奴がそうなのか……？ いや、確かに銀髪で片目が漆黒で片目が金じゃが……」

しかも信じられてないだっ！？  
いいだろう！

その挑戦、しかと受け取った！

「証拠を見せてやるよ」

＼side ナギ＼

「あのやけに元気な少女が……」

「ええ、ヘラス帝国第三皇女ですね。アリカ姫と交渉の為出向いたところ一緒に敵組織に捕縛されていたのです」

へっ、運命の奴なんか楽しそうだな。

ま、俺も俺の方の仕事をしますか。

姫さんはっ……

「さーて姫さん。助けてやったはいいけど、こっからは大変だぜ？  
連合にも帝国にも……あんたの国にも味方はいねえ」

「恐れながら事実です、王女殿下。殿下のオスディアも似たような状況で……最新の調査ではオスディアの上層部が最も“黒い”……  
という可能性さえも上がっています」

おっさんの調査は頼りになるからな。  
流石は元調査官。  
筋肉馬鹿とは大違いだ。

「やはりそうか……」

やはりそうかって……

姫さんも知ってたのかよ。

「我が騎士よ」

「だあらその“我が騎士”って何だよ姫さん！ クラスで言ったら俺は魔法使いだぜ？」

何回言っても聞いてくれない困るんだよ……

その我が騎士ってなんかムズ痒くなってくるしな。

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ ならば主は最早や私のものじゃ」

「な……」

どんな暴論だよ、それ。

「連合に帝国……そして我がオステイア。世界全てが我らの敵という訳じゃな……」。

じゃが……主と主の“紅き翼”は無敵なのじゃろ？」

はあ……

これは挑戦か？ 姫さん。

「世界全てが敵 良いではないか。こちらの兵はたったの8人。

だが最強の8人じゃ」

当り前だろ？ 俺達8人は最強！

俺達は“紅き翼”は無敵だぜ！

「ならば我等が世界を救おう。我が騎士ナギよ。我が盾となり我が剣となれ」

「……へ」

だから魔法使いだっつーのに……

「やれやれ、相変わらずおつかねえ姫さんだぜ。いいぜ、俺の杖と翼。あんたに預けよう」

「ひゅー！ いいもん見せて貰ったぜ？」

ん？ あれは運命 って！

「何お前召喚してんだよっ！」

「いや、こいつが俺のことを信用しなかったから召喚してみた」

召喚してみたってお前……

周りも口をあんぐりとさせてるぜ？

「ま、記念に祝砲一発上げとくか？」

「ちょ、おまつ……！」

「やるのじゃ、運命っ！」

「てことでバハムート・烈！ 上空に俺達の祝砲を打ち上げろ！

“ギガフレア”！」

金色の竜の口から放たれる劫火。

それは上空へと消え去り雲と衝突すると、辺り一面の雲を弾き飛ばす。

そして出てくる朝日。

それは俺達の出発を祝福するかのようだった。

たくっ……あいつって奴は。

いいところを持っていきやがって。

side out

「証拠とな？」

「ああ、証拠だ」

首をコクン、と傾ける仕草がマジでかわいいなw

そんな表情を見ておきたいが、証拠を出す方が先か。

「んじゃ俺の後ろに來い。てか、余り前に出すぎたら失神するだろうしな」

「何をする気じゃ？」

予想外に素直に俺の後ろに來たな。

まあその方がかわいいけどさ。

「こうするのさ。出てこい！ “バハムート・烈”」

その声に応じて出てくるのは金色の竜。

竜王バハムートよりも上位の存在である、破壊の化身。

「こ、これは……」

「一応これで認めてくれたか？」

「ああ……これぞまさしく【神獣の長】じゃな……」

茫然としているテオドラを俺はひょいっと担ぐ。

……軽っ！？

「な、何をするのじゃ……？／＼／／」

「ん？ 何かあっちでやってるからな。コイツに乗って登場しようかと」

俺が見るのはナギ達の方面。

大方あの名シーンをしているのだろう。

なら、それに俺も参加するというものが道理！

「何！？ これに乗るのか！？」

「ああ。止めとくか？」

恐いって言うなら止めとくけど。

「いや、乗せて欲しいのじゃ！」

「よし！ なら俺に捕まっておけ！」

「わかったのじゃ／＼／／」

俺に必死に捕まるテオドラ。

ん？ 何か顔が赤いけど……熱？

というのがテンプレかも知れないが、俺は理由がわかってるぜ！あれだ！ 決して俺に捕まってるのが恥ずかしいとかではなくて、

バハムート・烈に乗れることに興奮してんだろ。  
てかそれ以外考えねえよ。

「（うう、顔もかつこいいし恥ずかしいのじゃ、一目惚れかの／＼／＼）よし、では出発じゃ！」

「あいあいあさ〜！」

俺はバハムート・烈の背に乗り、ナギ達の場所まで飛んでいく。  
あまり距離は離れていないからゆっくりと飛んでいく。

「どうだ？ 気持ちいいか？」

「最高じゃ！（それにサダメの胸の中にいるっていうのが／＼／＼）

」

「そつか！ そう言ってくれると俺も召喚した甲斐があるってもんだ！」

あゝ、テンションあがって来た〜！

このまま直行するか！

んでナギ達はつと……ん？

どうしたんだ？ そんな顔して？

「ひゅー！ いいもん見せて貰ったぜ？」

「何お前召喚してんだよっ！」

「いや、こいつが俺のことを信用しなかったから召喚してみた」

俺は抱えているテオドラを少し持ちあげナギに見せる。

テオドラは未だに顔が赤かったが、俺は気にしない。

アルが生温かい眼で見てきたけど、これも気にしない。

「ま、記念に祝砲一発上げとくか？」

なんか俺のテンション暴走w  
もう凄いことになって来たw

「ちょ、おまつ……！」

「やるのじゃ、運命っ！」

ナギ達は絶句してるが、テオドラがGOサインを出したんで行くぜ！

「てことでバハムート・烈！ 上空に俺達の祝砲を打ち上げろ！  
“ギガフレア”！」

さあ、最終戦まで突っ走ろうか！

## 6話

さあ、反撃開始と行きますか！

「んじゃこれからは頭脳労働担当と肉体労働担当に分かれるか」  
「それがいいですね。頭脳労働は私達に任せてください」

そう言つてアルはアリカ姫やテオドラを見る。

まあ妥当だわな。

後はそこに臨時でダトウとタカミチと言つたところか。

「まあ肉体労働は俺とナギ、んでジャックと詠春くらいで事足りる  
だろ。てか絶対釣りがくる」

「ならこれで行きますか」

「ああ！」

それじゃあの白髪を狩りに行きますか！

それから俺達は“敵”だと判明した奴らをぶっ潰していく。  
味方を増やし敵は倒して外堀を埋めてく。  
ま、普通だわな。

その後も俺達は大活躍！

映画なら三部作、単行本なら1巻から完結まで持つていけるくらい  
の6か月の死闘後



遂に奴らの本拠地を突きとめ追いつめる！

まあ最初から知ってたけど教えられないし？

でもやはりと言うべきか、本拠地は変わっていった。

世界最古の都。

王都オスティア空中王宮最奥部【墓守り人の宮殿】！

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

なんでジャックが悪の組織のことを知ってただよww

「んなもんどうせ関係なくなるからいいじゃねえか。煩かろうが静かだろうがどの道行き先は地獄だ」

「はっ、違えねえ」

「ナギ殿！ 帝国、連合アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

お？

あれって若き日のセラスじゃね？

ほえ、美人さんだな。

「おう」

そんなヤツでもナギは無視かよ。

チッ、アリカ姫一筋ってか？

このリア充が！

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ？」

「ハッ！……それでナギ殿と運命殿」

「ん？」

「俺もか？」

「こっつてナギだけじゃなかったの？」

「ササ、サインをお願い出来ないでしょうか」

「おお？ ああ、いいぜ。それくらい」

「お安いご用さ」

「お二人とも尊敬していました」

「ウハハハハ！」

俺とナギはスラスラとサインを色紙に書く。  
俺もなんだかんだで有名人になってんだな。

お？

ガトウか？

俺とナギがサインを書き終わると同時に通信が入る。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることは出来ないか？」

本当に糞だな。

何で正規軍が大事な時に出撃しないかわからん。  
ガトウもタカミチも頑張っていると言うのに。

「無理ですね。私達だけでやるしかないでしょう」  
「既にタイムリミットだ」

アルも詠春も苦い顔をしている。

周りも似たような表情だ。  
ちなみに俺も。

「ええ。彼らはもう始めています……“世界を無に帰す儀式”を。  
世界の鍵“黄昏の姫巫女”は今、彼らの手にあるのです」  
「糞がつ……本当に気に食わない」

俺は口から言葉を零す。

確かにここは漫画の世界。

それでもここ人間は生きている。

俺と同じように。

それなのにこんな馬鹿げた行為をするなんて

反吐が出る。

「ああ。だからこそ俺達は動くんだろ？」

「……そうだな。俺達は別に世界平和を願って行動してるんじゃない。  
い。確かにアリカ姫の願いはこの世界を平和にすることだが」

俺は独白する。

そう。

俺は平和な世界を創るために行動していた訳じゃない。

ただただ気に食わない連中が居て、それを叩き潰していたら何時の間にか“英雄”と呼ばれていた。

ただそれだけ。

「ただ自分の信条の為。俺が俺であるという存在の証の為」

だからこそ俺はこんな馬鹿げた連中を叩き潰す。

俺を悪と呼んでも構わない。

それでも俺は貫き通す。

「さあ行こう。これが本当に最後の戦いだ。俺達に負けは許されない」

俺は息を吸い込む。

魔力を体に行き渡らせる。

俺が召喚するのは現在の手持ちで一番強いであろう召喚獣。

「これが開戦の合図だ。さあ来い！ “バハムート・零式”！」

呼び声に応じて姿を現す竜。

竜王にして竜の頂点に存在する竜。

それは最早“竜神”と呼んでも過言ではない。

「一撃だ。それで戦況をひっくり返せ。目標はあっちから迫ってくる軍団。出来るか？」

『我を誰だと思っている。我こそが竜の頂点に立つ者ぞ？』

「クククツ、そうか。ならその力を見せてみる！」

『よかるう、此度の主よ。その眼に我が力をしかと焼きつける！

“テラフレア”！』

竜神から吐き出される劫火でも業火でもない炎。

それは一撃で敵を壊滅させる。

全てを焼き尽くし、全てを消し去る。

『見ていたか？ これが我の力だ』

「ああ、十分だ。後は適当に暴れておいてくれ。くれぐれも仲間には攻撃するなよ？」

『わかっておる』

「そうか。なら行くぞ！俺達が通すべき信念を通すために！」

「よおしつ、野郎ども。行くぜっ！」

side セラス

私は今、帝国と連合アリアドネー混成部隊と“紅き翼”と一緒に私達の真の敵である“完全なる世界”を倒すために【墓守り人の宮殿】に来ている。

そしてその周りには私達を牽制する敵。

「こんな数に勝てるの……？」

私は茫然となつて呟く。

いくら混成部隊を結成出来たと言っても、敵の数は私達の倍以上はいる。

そんな数に圧倒されながらも、どうやら部隊編成が終わったようなのでナギ殿達に伝えに行く。

「ナギ殿！ 帝国、連合アリアドネー混成部隊、準備完了しました」  
「おう」

ナギ殿は私の方を向かずに返事をする。

……少し寂しい気もするけど、仕方ない。

でも何故か運命殿は私を見つめている／＼／＼

漆黒のコートに銀の髪は似合っていて、その姿は見惚れるくらいに綺麗だ。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ？」

ナギ殿にそう頼まれるが、私的にそれが遂行出来るか分からない。  
いや、出来ないだろうと私は思う。

敵の数が多すぎる。

それだけで戦況というのは傾くのだから。

それでも私はそんな不安を顔に出さないようにして返事をする。

「ハッ！ ……それでナギ殿と運命殿」

「ん？」

「俺もか？」

少し恥ずかしいけど、お二人に頼みたい事がある／／／／  
私はこの二人のファンなのだ！／／／／  
もちろんファンクラブにも入っている！／／／／

「ササ、サインをお願い出来ないでしょうか」

「ああ？ ああ、いいぜ。それくらい」

「お安いご用さ」

何と二人は気さくに了承してくれました！

ああ、何てうれしいことでしょう。

これだけで私は戦争に勝てる気がします。

「お二人とも尊敬していました」

「ウハハハハ！」

うう／／／／

ラカン殿に笑われました。

そしてお二人が私にサインを書いて下さると同時に通信が入ります。

……あれはガトウ殿でしたね。

紅き翼のメンバーはガトウ殿の話を聞いて苦い表情になっていきます。

私は鏡がないのでわかりませんが、同じような顔になっているでしょう。

何故こういう時でさえ、あの人達は助け合うことが出来ないんでしょうか。

「糞がっ……本当に気に食わない」

そして運命殿の呟き。

それはこの場にいる全ての人の心の代弁でもあります。本当に悔しそうに。

「ああ。だからこそ俺達は動くんだろ？」

「……そうだな。俺達は別に世界平和を願って行動してるんじゃない。確かにアリカ姫の願いはこの世界を平和にすることだが」

私は驚きました。

運命殿が平和の為に行動していると思っていたのに、それが違ったことに。

いや、“紅き翼”のメンバーの気持ちは運命殿と一緒にだったようです。

「ただ自分の信条の為。俺が俺であるという存在の証の為」

この独白を聞いて私は思います。

彼らを“英雄”に仕立て上げたのは私達だと言う事に。

彼らはただ自分達の信念に添って行動していたと言う事に。

「さあ行こう。これが本当に最後の戦いだ。俺達に負けは許されない」

でも、だからこそ私は彼らを“英雄”だと思います。だって

「これが開戦の合図だ。さあ来い！ “バハムート・零式”！」

気に食わないという理由だけで世界と戦えるんだから。

「一撃だ。それで戦況をひっくり返せ。目標はあっちから迫ってくる軍団。出来るか？」

『我を誰だと思っている。我こそが竜の頂点に立つ者ぞ？』

私達の前に姿を現す竜。

その魔力は強大で、立っているだけで私達を圧迫します。

……運命殿はどうやってこんなものを従えているんでしょう。

周りも同じような感じで、唯一平然としているのが召喚した主の運命殿だけ。

「クククツ、そうか。ならその力を見せてみる！」

『よかるう、此度の主よ。その眼に我が力をしかと焼きつける！』

“テラフレア”！」

竜の口から吐き出される炎弾。

それは圧倒的でした。

あれほど居た敵の半分を一気に削り取ってしまわれたのですから。



『見ていたか？　これが我の力だ』

「ああ、十分だ。後は適当に暴れておいてくれ。くれぐれも仲間には攻撃するなよ？」

『わかっておる』

「そうか。なら行くぞ！　俺達を通すべき信念を通すために！」

「よおしっ、野郎ども。行くぜっ！」

そうして“紅き翼”のメンバーは黄昏の姫巫女が囚われている最奥部に突入してきました。

どうやら運命殿が召喚した竜はここに残ってくれるようです。

……でもこの竜がいるだけで私達には必要ないような気がします。

＼side out＼

そして突入に成功する最奥部。

思った以上に簡単に突入出来た。

「やあ【千の呪文の男】、【銀色の魔王】。また会ったね。これで何回目だい？」

「さあな。これも今日で終わりだから気にするな」

そして現れるフェイト。

仲間も引きつれて　　って！

何か人数増えてる！

原作なら一人に対して一人だったのに！

「僕達もこの半年で君達に随分数を減らされてしまったよ。この辺りでケリにしよう」

「そうだな。さてあちらとこちらの数は一緒か。一人ノルマー人だ。やれるよな？」

「誰に言ってんだ！ 俺は最強の魔法使い、ナギ・スプリングフィールド様だぜ？」

こんな時でも不敵な笑みを浮かべる。  
かつこいいな、ホント。

「それじゃあ開戦といきますか！」

「おおっ！」

「うむっ！」

俺の言葉と同時に両者が突撃する。  
一番戦いやすい相手であろう人物に攻め入り、全員が散りじりになる。

「俺は残り物かな？ ま、『残り物には福がある』って言うし？」  
「はっ！ 減らず口を……」

どうやら俺の相手は原作に登場しなかった奴のようだ。  
さて

潰すか。

6話（後書き）

アーティファクトが決まらなええええええええええWW

## 7 話（前書き）

## 7話

「とりあえず様子見と行くか。デウス・エクス・マギナ 闇の精霊 300柱“魔法の射手・連弾・闇の300矢”！」

「様子見で300人って馬鹿なのか！？ 糞が！ グル・デス・ゲオル・ゲオルグ 氷の精霊300柱“魔法の射手・連弾・氷の300矢”！」

俺と相手の魔法が中間で激突する。

どうやらこの位の魔法では勝てないようだ。

……わかってたけど。

両者の魔法は激突し相殺しあう。

「なかなかお手前で。ならこれならどうだ？」

「ッ！」

俺は咸卦法を発動し、接近戦を仕掛ける。

俺の魔力と気は無尽蔵と言っていいほど馬鹿げている。それを合成するとどうなるだろうか？

「ハッ！」

俺は唯一使えるナイフ片手に高速戦に持ち込む。

左に斬り払いを行い、残っている手で相手の顎に掌底を打ち込む。相手もそう簡単に倒される訳もなく、俺の斬り払いを避け、掌底を手で反らす。

その後も俺はナイフの連撃で距離を詰めていくが、あまり戦況は変

わらない。

「面倒だな、オイ！」

「うるせえなあああああ！」

今度はあちらの番らしい。

武器は槍のようだ。

アーティファクトのようでアデアットの言葉と同時に現れる。

「能力がわからんから迂闊に攻めねえ……」

「ならこっちから行くぜ！」

繰り出されるは高速の突き。

俺はそれをナイフで弾き避け、相手に接近する。

相手はそれを予測していたようで、すぐさま槍を引き薙ぎ払いを繰り出す。

それはしゃがんで避け、俺は足払い。

それを相手は跳躍で避け、上空から刺突の連撃。

俺は縮地で攻撃範囲から避難する。

強いな……

それが相手に対する感想だった。

普通の相手なら最初の斬り払いからの顎先の掌底で沈む。  
なら

「さあ轟け 地獄にして天国 この世の終わりの炎にしてこの世の  
始まりの炎」

「ッ！ 詠唱か！？」

「遅い！ “深淵なる業火”！」

無詠唱でも唱えられる中級の魔法だが、今回は距離が離れていたの  
で詠唱を行い威力の底上げをする。

突然の魔法に対処出来なかった相手はその業火に飲み込まれる。

「これで終わりという「わけねえよなあああ！」ぐはっ!？」

かはっ!

あの奇襲を回避したと!?

確かに倒せるとは思っていなかったが少しのダメージが入ったとは思  
ったんだが……

俺は相手を見る。

あいつはニヤニヤ笑いながら俺を見ている。

そしてその手には“輝く”槍。

輝く?

「なるほど。魔法吸収または魔法無効化のアーティファクトか」

「御名答。魔法無効化のアーティファクト。名前を“ゲイジャルク

”

「……………」

ゲイジャルクって……

ランサーかよ!?

「これでお前の魔法は効かない。勝負あったか？」

「だからどうした？」

「ああ？」

魔法が効かない？

だからどうした。

魔法が効かなければナイフで殺せばいい話だ。  
それに

「魔法が効かないなら“これ”を解放出来るしな」  
「なっ!？」

俺は今まで誰にも言わなかった片目、“直死の魔眼”を解放する。  
それと同時に俺の片目は漆黒から蒼に変化する。

「……何だ？ その眼」  
「教えると思うか？」  
「んなわけねえか」  
「その通り！」

そして俺は突撃する。  
先ほど受けたダメージはとうの昔に回復した。  
そうして俺は相手を見る。  
直死の魔眼を解放している今、今まで見えなかった“死の点”と“死の線”がはつきりと見える。

「お前の負けは決まったな 閃鞘・八点衝」

俺は初速にして最高速に乗る。  
最早縮地以上の早さで地を駆る。  
相手からしたら一瞬で自分の前に現れた感じがするだろう。  
そして斜め上から斜め下にかけて連続で切りつける。  
相手もギリギリ反応してくる。

「双狼」



「なあ！？」

ナイフによる左右同時攻撃。

この時にアーティファクトの“死の点”を斬り裂き“殺す”。

「終わりだ　　極彩と散れ……」

上空より姿を現し頭上から相手を斬り付け、音も気配すらも断ち切り、相手の足元に忍び寄り下から上に切り上げ、左右同時に相手を斬り付ける。

全ての斬撃は“死の線”を捉え、全てを“殺す”。

「　　閃鞘・迷獄沙門」

最後に“死の点”を突き刺し、その存在を“殺しつくす”。  
その場に残るのは静寂。

「そう言えば名前を聞くのを忘れていたな……」

俺は“直死の魔眼”を封印する。

それと同時に蒼の瞳から漆黒の瞳に戻る。

「さて、ナギ達は無事だろうか……」

俺はそうしてその場を後にする。

その場所には何も残っていなかった。

「どうやら心配はいらなかったようだ……」

ナギの下に辿り着くと、ナギはフェイトの首を掴んでいるシーンだった。

他の仲間達も勝ったようで、続々と集まってくる。

「見事……理不尽なまでの強さだ」

「黄昏の姫巫女は……どこだ？ 消える前に吐け」

そう言えばこの後に大ボスが来るんだったか？

「フ…フフフ…まさか君は未だに僕が全ての黒幕だと思っているのか？」

「なん……だと？」

チッ！

間違いない！

「ナギ！ 退けええええええ！」

「なんだ！？」

ドズンッ！

あの野郎！

仲間ごと撃ちやがった！

「ナギ！」

「誰だ！？」

「いかんッ！ 運命、合わせろ！」

「わかつてる！」

「最強防護」！

「守護結界」！

俺と師匠の二人がかりで最強の防御魔法を発動する。

これで大丈夫の筈                   ！？

「あのランクの攻撃を連続だと！？」

一撃目で師匠の魔法が砕け散り俺の魔法に罅が入り、二撃目で俺の魔法までも砕け散る。

ヤバイ！

どうする！？

「糞っ！ 少しの間時間を稼いでくれ！」

「「「任せる！」「」「」

俺は他の仲間が防いでいてくれる間にもう一つの眼を解放する。  
俺のジョーカ！。

「“刳の眼”解放！」

効果は十分。

俺は願い浮かべる。

この攻撃を塞ぎ通す未来を。

この黒幕を倒す未来を。

この世界で誰もが笑って暮らせる未来を！

「後は任せるッ！ “夢と現実の狭間”！」

俺は現段階では発動不能な魔法を発動する。  
位相をずらし全ての攻撃を防ぎきる最強の防御魔法。

「運命……その眼は」

「そんなのは後だッ！」

願え！

手繰り寄せる！

この魔法が成功する未来を！

「うおおおおおおおお！」

そして光に包まれた。

「全員……無事か……？」

光が収まると同時に俺は倒れ込む。  
どうやら魔力や気は足りていても、俺の体力が足りないようだ。

「ええ。あなたのおかげで全員生き残っていますよ」

「そうか……後は頼めるか……？」

「……俺に任せとけ！」

「ナギ……」

俺の意識が段々と遠くなっていく。

頼んだぞ、ナギ。

あいつに勝てるのはお前くらいだからな。

「……絶対に勝ってこい。これは約束だ……」

「……ああ！」

「……俺、は……一度寝……る……」

そうして俺の意識は暗闇に落ちた。

## 8話

「……知らない天井だ」

とりあえず呟いてみる。

どうやら俺がここで生きているということはナギは勝ったんだな。

「起きましたか？」

「アルか」

ドアを開け入ってくるのはアル。

その手には果物などが入ったカゴを持っている。

「俺は何日くらい寝ていた？」

「あの戦いの後から換算すると3日ですね」

それだけしか寝ていないのか。

まあ一カ月寝るとかより断然いいけど。

「んで、どうなった？」

「そうですね。あの後、ナギが相手のボスを破り、黄昏の姫巫女も助けることが出来てハッピーエンドでしたよ？」

「……師匠は？」

「……………」

原作だと死んだ（と思う。まだそこまで連載されてなかったし）筈だ。

今回は俺の介入があるからどうなった確認しないといけないんだが。  
……この様子だと

「       ゼクトは逝きました」  
「       ……そうか」

それからもう少し詳しい話を聞くと、どうやら殆ど       てか全部同じだったようだ。

「お！   やっと起きたのか、運命！」  
「ナギ達か」

ドアがバン、と開け放ち馬鹿達が傾れ込んでくる。  
ちよっ！

「苦しいって！   ジャックも何気に関節を決めるのを止める！」

今まで倒れてた奴にすることが！？

ナギも何で抱きついてくる！

俺は同性に興味はない！

「いや、ホント心配してたんだぜ？       倒れた後、中々起きないからさ」

「それは心配をかけたな」

「ま、ちゃんと起きてきたからいいじゃねえか！」

バシバシと俺の背中を叩くジャック。

お前は俺を攻撃することしか頭の中にないのか？

「それでは私はこれで……」  
「ん？」

そう言い残し、アルは転移してどこかに消えた。  
どこいったんだ？

「そういえば今から式典があるんだったな。ということで運命、行くぞ！」

「興味ねえ……」

そう言っているのに、ジャックに担がれていく。  
何で病人？の俺を連れていくんだ……

「運命ッ！ お主体は大丈夫なのか！？」

出典の場には、アルと師匠以外のメンバーが揃っていた。  
俺はジャックから降ろしてもらい、テオドラの頭を撫でる。

「ああ。もともと体力切れで倒れただけだな。ま、心配してくれてありがとな」

「そ、それは当然の事をしたまでじゃ！／／／／」

テオドラは優しいな。

そんなことを思い、テオドラの頭を撫でながら式典は進んで行った。  
え？ 内容？

そんなもん覚えてるわけないじゃん。



そういやオスティアは落ちたらしい。  
やっぱり原作通りにアリカ姫は大罪人として囚われるのか。  
チッ……ままならねえなあ。

あれから数カ月。

未だ俺達“紅き翼”は紛争地域を巡っている。  
戦争は一応終わったが、未だに残党などは残っている。

「面倒だな……」

「俺だつてそうだ……早く帰らねえと姫さんが……」

糞っ！

一人だけ女を持ちやがって！

「今日も無事のようじゃな」  
「当たり前だろ？」

何故か俺は現在テオドラの下で働いています。  
役職？ 護衛らしいよ？  
俺もあの式典の後、急に聞かされた話だし。

「そっぴやあれ届いた？」

「ん？ ああ、そこに置いてあるぞ？」

俺はテオドラが指を示す方向に目を向ける。  
そこには一つの模型が。

「やつと別荘が手に入ったよ……」

「一応現在手に入る最高のものを手配してもらったからの」

そう。

俺はテオドラに護衛をする話を勝手に決めた代わりに、別荘を買った。

一応、俺单身でも似たようなものは出来るが、他のもの（例えば家や、食べ物など）は用意出来ないので仕方なく用意してもらった。

「でも何で必要なんじゃ？」

「……力が欲しいからな」

「力？ 運命はそれ以上に強くなりたいのか？」

俺は力不足だった。

俺にもっと力があれば、師匠を救えたかも知れない。

俺にもっと力があれば、アリ力姫が大罪人と言われる未来を消せたかも知れない。

でもそれはIF<sup>もし</sup>の話。

いくら願ったって出来やしない。

なら俺がすることは何だ？

「ああ。俺はもう誰も傷つけさせない。今度こそ大切な人達を守って見せる」

「そ、そうか／＼／＼（横顔がかっこいいのじゃ）」

絶対に守って見せる。

例えこの身が朽ち果てようとも。

「もちろんその中にはテオも入ってるからな」

俺はそう言ってテオを撫でる。

この呼び方も護衛の仕事が入ってから呼び始めた呼び名だ。

「あ、ありがとう……／＼／＼」

そう言って下を向く。

どうしたんだろうか？

「だから俺は少し鍛錬をしてくる。なに、一年もあれば帰ってくる」

「……行くなと言っても行くんじゃない？」

俺にしがみつきながら呟く。

そう寂しがるなよ。

「まあな。これについては謝るしかない」

「……なら行ってきたでもいいのじゃ」

「いいのか？」

「……その代わり誰よりも強くなってくるのじゃ。誰にも負けない、世界最強の魔法使いになってくるのが約束じゃ」

「……ああ、約束しよう」

俺はもう一度テオを撫でる。

そうすると、テオも俺から離れる。

その顔は笑顔。

「いつてらっしゃいなのだじゃ！」  
「……いつてきます」

別荘の中は多種多様な場所だった。

砂漠、雪山、海、樹海、塔、城、e t c。

どうやら本当に最高品質のようだ。

どの場所にも魔法陣の乗れば一瞬で移動が可能。

「本当に良い場所だわ……」

外と中の時間差はエヴァと同じで1時間で1日。  
丸々1年使つと24年の修行が出来るな。

「ま、ぼちぼちと始めていくか……」

これからする修行は“空間”でも“時間”系統でもない。  
確かにどちらにもマスターすれば多に役立つだろうが、火力面で問題が出る。

“空間”はどうしても防御としか使えないし、“時間”も加速などの補助でしか扱えない。

「だが、これは違うぞ……？」

俺がまず目を付けたのがエヴァの“闇の魔法”。

これは属性魔法を固定し、術式として掌握することによって自分の力をアップするドーピングのようなものだ。しかも精霊化という才

マケ付きで。

まあ最初はこれを覚えようとしたが、止めた。

何故かと言うと、まずこの流れだとこのまま原作に介入することになる。

それなのに主人公のネギが使う技を俺が使うのはちよつと……  
と思い断念。

そして閃いた。

咸卦法の合成する魔力に属性という指向性を持たせるとどうなるか。  
咸卦法とは、本来魔力と気という相反する力を合成することによつて反発する力により莫大な力を得る技法である。

その分、指向性のない魔力を合成するだけでも大変だ。  
なんせ相反する力は本来混ぜり合うものじゃないし。

それに尚且つ指向性を持たせるとどうなるか。

これは誰にもわからないだろう。

もともと咸卦法だけでも難しいのに、これ以上の難度をクリア出来る人物が過去に存在しなかったのだろう。

だからこそ、俺はこれを試してみる。

もしこれが出来たなら、俺はまた一歩強くなれると思うから。

「出来た……」

あれから1年。

咸卦法に属性を混ぜ合わせるのがこんなに難しいとは思ってなかつ

た。

「これだけチート仕様の俺でも1年かかるとは……」

そう、ただ属性を混ぜ合わせるだけでも1年かった。

しかもこれだけでは実践には使えない。

もつと高ランクの魔法を合成出来ない……

「やっと“雷の暴風”クラスの魔法を合成出来るようになった」

どうやらこのクラスになると上級精霊と同格になるらしい。

俺が咸卦法に“雷の暴風”を混ぜ合わせると、雷の上級精霊と同格になった。

その後も調べてみると、この状態でその属性に合わせて魔法を放つとその属性の威力が上がる事が判明。

それとその属性の攻撃を受けてもダメージはなく、しかも自分の魔力として還元出来る。

なんとチートwww

ま、“闇の魔法”みたいに特殊効果は威力上昇以外ないけど、普通に“闇の魔法”より強いねww

俺が使えばの話だけどww

試しにこの状態で豪殺・居合拳を撃ってみた。

すると、普通なら気弾が飛ぶところが、この状態ならその属性の気弾？とも魔力ともとりづらいものが飛んで行った。

まあ別にどっちでもいいから簡単に言ったら、俺の“雷の暴風”を無詠唱で尚且つ100%の力で放ってるようなもんだ。

これは反則クラスだわw w  
なんたつて無限に撃ちまくれるからなw w

「これが完成系か……」

あれから数年。

俺もやつと最上級クラスの魔法を合成することに成功した。  
どうやら最上級クラスの魔法を合成すると、精霊神と同格と言つか、  
精霊神の領域に足を踏み入れるらしい。  
ホントヤバイw w w

しかもこの状態になると、俺が「これは流石に無理だろw w w」と  
考えていた魔法が発動出来るようになったw w

例えば“燃える天空”を咸卦法と混ぜ合わせると炎の精霊神となる  
ので“炎神”と言う風に呼ぶことにする。

んで、“炎神”の状態なら“始原の炎”と俺が呼んでる、実質最強  
の炎属性の魔法が発動出来る。

これは俺が暇だったので“燃える天空”を超える魔法を創ろうとし  
て考えていた魔法で、発動すれば擬似的な太陽を創りだせるw w

正直ヤバイ。

試しに雪山で使ってみたら雪山の雪が溶けた。  
まあこれだけだったらいけど、山も溶けた。

てか消滅したよw w

戻ったら直してもらわないとw

んで、俺はこの技法の名前を考えていた。

「やっぱり咸卦法から創ったもんだし、名残は残しておきたいな」

ん、最強の状態になったら“精霊神”の領域に足を踏み入れるし、

“神卦法”でいいかな。安直で厨二臭いけど……これでいいか」

なんか名前に神なんか入ったりすると、途端に厨二臭くなるよね。そんなことを思いながら一息。

「久しぶりに外に出るか。テオにも顔出したいし」

思い立ったが吉日。

俺はすぐさま荷物を纏めて、外の世界に戻った。



## 9 話

「アリカ姫が捕まった……か」

俺が外の世界に戻った時の第一声がこれ。  
やはり……か。

「何で運命は大事な時にいないのじゃ！」  
「……スマン」

糞っ！

居たとしても何も出来ないかも知れんが、それでも居たかった！  
出典の時は覚えていた筈だろ！？

「ま、まあしょうがない部分もあるのじゃ。今回のことは誰一人と  
て予想すらしてなかったんじゃないの」  
「……………」

何でいつも俺はこうなんだ。  
いや、今は後悔する時じゃない。

「テオ」

「なんじゃ？」

「ナギに会ってくる」

「……そうか」

俺の言いたいことは汲み取ってくれたようだ。  
流石は皇女様だな。

幼くても根元はしっかりしてる。

「んじゃ夜には戻ってくる。夜は久しぶりに一緒にご飯食べるか」  
「わかったのじゃ！」

テオは笑顔で俺を見送ってくれた。  
ホント出来た子だわ。

「助けに行かないのか、ナギ！」

どうやら俺以外の全てのメンバーが揃っていたようだ。  
久しぶりに見るな。

「お、運命じゃねえか。今までどこに居たんだ？ 結構探したんだが」

「スマンな。別荘に籠って修行してたからアリカ姫のことを知らなかった」

「そうなんですか。まあ居たとしても何も出来なかったでしょうが」  
「……そうだな」

なかなか辛辣な言葉を掛けてくれるじゃねえか。  
それにしても詠春がうるさい。

「ナギ、行かないのか！？」

「確かに今回は詠春に同意しますよ。後1年もないんですよ？」

「……………」

「ナギ！？」

「少し詠春黙れ」

「だがな！」

「なあナギ……」

俺は静かに語りかける。

俺はコイツを良く知ってるからわかる。

誰よりも悔しくて誰よりも悲しんでいる。

それくらい俺達ならわかるだろうが。

それなのにみつともない声を出すんじゃないよ。

「せめて返事くらいしてやれ。それじゃまるでお前が助けに行かない風に取りられるぞ」

「な！？」

「行くんだろ？　ならちゃんとそれを言葉にしてやれ。今はまだその時じゃないんだろ？」

「運命……」

ナギの眼は死んでいない。

ちゃんと決意が籠った良い眼をしてる。

これが死んだ魚のような眼だったら俺が殴って目を覚ましてるけどな。

「なあ……立派な魔法使ってなんだろうな。正義ってのは一体なんなんだ？」

「また難しい質問ですね」

「ああ」

アルと詠春が反応する。

詠春は俺の言葉で我に返り、ナギの眼を見て何も言わなくなった。

「その質問は人それぞれと答えるしかないだろう」

「運命……」

「例え話をしよう。一人の少年が居た。その子供は養ってくれる人もなく、路地裏での生活を送っていた。ある時、餓死寸前まで行き、もう空腹に耐えられなくなってしまう、パン屋からパンを一つ盗んでしまった。これは悪か？」

「それは……」

「そう。客観的に見ればこれは悪かも知れない。盗むということが犯罪だからな。だが、これを裁くか？ 裁いた人間が正義なのか？ それは誰にもわからない。悪かも知れないし正義かも知れない。結局はそういうことなんだ。それに」

「それに？」

俺は一つの考えを話す。

「これは俺の考えだがなのはなと思うてる」

俺はこの世界には“正義”なんても

「「「「「なっ！？」」「」「」」

メンバーの誰もが驚く。

今まであれほど言ってきたのに、途端に手のひらを返したらそうなるわな。

「俺達はこの世界では“英雄”なんて呼ばれてるよな？」

「ああ」

メンバーが頷く。

「だけどな？ 一方では“悪魔”なんかとも呼ばれてるし、恨まれていたりする。そりゃそうだろ。俺達は数え切れない数の人間を殺

してきたんだからな」

「それは……」

「そう。俺達は自分達が持つ信念の下に行動しただけ。これに正義なんてものはない。それが結果的に周りが正義と呼んだだけ。これは環境が変わったら悪魔と呼ぶかもしれないものなんだ」

「……………」

誰もが黙り込む。

反論が出来ないからだ。

俺達は数え切れない数の人間を殺した。

それは疑いようのないもので、決して覆らない。

「でも後悔だけはするなよ？ 俺達は人を殺したんだ。その人の人生を奪ったんだ。それが例え糞みたいな人生を送っていた奴でもな。それは殺した人に対して最大の侮辱だ。そう思うなら最初から行動するな。そうなる前に考えろ」

「……………」

「だから背負え。背負って笑え。俺達は絶対に後悔しないと。俺達は自分達が生きる為に誰かを殺したんだ。相手も生きる為に俺達を殺そうとしたんだ。殺すものは殺される覚悟をしなければならぬ。とつくの昔にしてるだろうが、今一度思い出してみろ」

全員が眼を閉じて思い出す。

人を殺す覚悟をしたあの日を。

それと同時に殺される覚悟をしたあの日を。

「そんな世界に“正義”なんてものなんかあるか？ あるのは“悪”だけだ。それが“優しい悪”か“恐い悪”かは知らんがな」

俺の独白が終わる。

柄にもなく喋ったな、俺。

「運命……」

「ナギ。俺達はもう行動を起こしたんだ。ならもう前を進み続けるしかないだろ？」

「そう……だな」

「さあ今日はもうこれで解散だな。ちょい精神も疲れたろ？俺は疲れた」

そう言つて俺は帰ろうとする。

ま、これで大丈夫だろ。

それに俺が今日語ったものなんて、所詮一人の考えだしな。だが、俺はこの言葉だけは真理だと思っている。

“正義の反対はまた別の正義。悪の反対はまた別の悪。だが正義は絶対的に正義となるかはわからなく、時として悪になるだろう。しかし悪は時として正義にはならず、” “善” となるだろう”

だから俺は正義なんてものはこの世界ないと思ってる。

“善” の存在は認めるけど。

あれからまた数か月。

アリカ姫処刑の日は近づいてくる。

そんな中、俺達はメンバー全員で晩飯を食べていた。え？ あんだけシリアスな雰囲気やっというてこれ？

そう、これです！

結局俺の独白の効果かは知らんが詠春達もナギについては納得したみたいで、前みたいに仲良くなりました。

「そう言えば、運命。聞きたい事があるんですが」  
「ん？ 何だ？」

俺は肉料理、なんの肉は知らんけど、それにフォークを突きたてながらアルの話に耳を傾ける。

最近肉は食ってなかったから、涎が垂れっぱなしだぜw

「あの最終戦で使った瞳は何なんですか？」  
「ゴフツ！」

あああああああああああ！  
そう言えばバレてたんだ！

「そう言えば眼が光ってたな」

「俺は良く見てねえや」

「お前は倒れてただろ……」

「あの時、後で説明してくれると言いましたよね？」

チツ！

憎たらしい笑みを浮かべやがって！

だがどうする？

素直に説明するか？

まあ、説明しても問題ないしな。

「はあ……あれは俺のジョーカー。言わば禁じ手だな」

“ 却の眼 ” はジョーカー。エースではなく。

あんなものポンポン札を切れるわけがないし。

「ジョーカー……ですか？」

「どんな能力なんだ？」

「……これは口外するなよ？」

「……「ああ」「……」

「簡単に言っとだな」

「……「ゴクッ……」「……」

「自分が望む未来を手繰り寄せる能力だ」

「……「はあ!」「……」

流石に驚くか。

まあそうだろうな。

明らかにチートだし。

「……本当なんですか？」

「ああ。ま、少し条件があつて一日10分しか使えないけど」

「それでも反則じゃね？」

「だからジョーカーなんだよ」

「なるほど……」

「あん時はこれで自分の魔法が絶対に発動する未来を手繰り寄せたからな。あれがなきゃ全員がお陀仏だったかもな」

ケラケラ笑いながら俺は飯を食べていく。

他の奴らは顔を青くして冷や汗を垂れ流している。

「あともう一つも紹介しておこうか」

「まだあるのか？ お前どんだけ反則キャラなんだよ」

「見ろよ。詠春のなんか頭抱えてるぞ？」

「俺に言うな」



ほら詠春も頭抱えてないで飯を食え。  
たくっ……

「んでもう一つは……実践した方が早いかな」

俺はそう言って席を立ち、近くにあった花を持ってくる。  
周りが疑問顔だが気にしない。

「これもオフレコだぞ？ いいか、良く見とけよ」

俺はそう言って“直死の魔眼”を解放する。  
メンバーは俺の瞳の色が急に変わったことに驚いていた。

「行くぞ？」

そして俺は花の“死の点”を突く。  
すると、花は急に枯れ落ちたような感じになってしまふ。

「……「なっ！？」」「……」

これも驚くか。

ま、正常な反応だな。

「これは存在してるものを全て“殺す”能力だ」

「……無茶苦茶です」

「……それって人に効くのか？」

「ああ」

「お前、絶対俺達に使うなよ！？」

「当たり前だろうが……」

俺は嘆息する。

何を好んで仲間を殺さなきゃならんのだ。

「本当にあなたはバグキャラですね」

「はぁ……」

こんな感じで今日一日は過ぎていく。

……そろそろこんな生活も終わるか。

## 10話

「とうとうこの日が来たな……」

今日はアリカ姫処刑の日。

ナギ以外のメンバーは既に処刑場所にやってきている。

「ナギはどこだ？」

「……あっちだな」

詠春の問いに俺は答える。

ナギの魔力を探すと、どうやらあの影になるところにいるらしい。

「それにしてもよくこれだけの屑を集めたな、老害共め」

俺は眼下に広がる兵士と、元老院の屑共を見て呟く。

「本当に屑共だ……救いようがない」

俺は呟きながら、辺りを見回す。

俺の言葉に他の連中は苦い顔して暗くなるばかり。

「これより、戦争犯罪人アリカ・アナルキア・エンテオフユシアの処刑を開始する！」

その言葉に伴う絶叫。

誰も彼も真実など知らなく、嘘の偽りに騙され信じ込んでいる。その咆哮が止んだ時、アリカ姫は谷底に突き落とされた。

「さあ行くぞ。俺達最後の戦いだ！」  
「「「「「応つ！」「」「」」」」」

アリカ姫はナギが飛び出すのを確認しているため放っておく。  
俺達は即効で元老院の老害共に近づき気絶させる。

私的には殺したいところだが、それでは本当の犯罪人になってしま  
うため断念。

そんな中、俺達を囲んでいる兵士はジリジリと後退し始める。

「殺される覚悟のない者が人を殺そうとするな！ 出でよ！ 我が  
召喚獣達！」

俺は召喚獣を数体召喚する。

この場で有効そうなのは、ケツアクウアトル、ラムウ、イクシオン  
などの雷系統の召喚獣。

殺しはしないが感電しとけ！

「サンダーストーム」、「マインドブラスト」、「エアロスパー  
ク」

一瞬にして地に倒れ込む兵士達。  
中には痙攣している奴もいるが無視。

「はっ、雑魚すぎる」

「あなたがバグキャラなだけです」

俺の呟きにアルが反応。

そんなにバグかね？

ま、どうでもいいけどな。

お？

どうやらネギがうまくアリカ姫を救出できたみたいだ。  
お姫様だつこで抱えて飛んでくる。

「遅いぞ我が騎士」

「ヒーローは遅れて来るもんだろ」

そして二人は見つめ合い、唇を合わせる。  
そんな光景は絵になる。が！

「ひゅー！ お熱いことでw」

俺は断じて許さない！w  
リア充共がつ！

「さ、運命っ！」

「まあまあ、今はまだやることがあるだろう？ とつととそれを終わ  
らせようぜ？ んで帰って皆でパーティーだ。ドンチャン騒ぎをし  
ようぜ！」

「ふふっ、いいですね」

「そうだな」

そして俺達の戦いはここに終結した。

また日が飛んで、俺は今世界を旅してる。  
え？ いきなりだなって？

だって特に言うようなことがなかったし。

ああ、そういや俺だけ京都に行かなかったんだわ。  
なんか面倒だろうと思って。

どうせ行ってもスクナ退治だぜ？

だから行かないことにしたんだ。

まあ周りからは渋られたけど。

んで、やっぱりと言うかスクナ復活。

それで封印w

そんなノリでなんか俺達の古いアジト、所謂詠春がネギに紹介したアジトね。

そこで写真を取るって流れになったらしいんだわ。

しかもそこに俺も呼びよせて。

何で俺まで？ って聞いたら、？って顔されたよ。

まあ転移で一瞬だったからいいけどさ。

その写真も原作通り、あの写真立てに飾られることになった訳だ。  
これが世界の修正力なんかな？

ま、それでもちゃんと呼んでくれてうれしかったけど。

それにしても何で俺がこんな回想してるかって言うと

「話を聞け！ 【時空統べし帝王】」

なんかエヴァと遭遇したんだw

「なあ貴様、なぜ私を助けた？」

やっちまったぜ……

つい崖から落ちそうになってる女の子を条件反射で助けてしまった。  
これが普通の女の子なら大丈夫なんだが、エヴァなんだよなあ……

「おい無視するな、はやく答えろ」

ん〜、どうしょ……

これってナギが助けるイベントだろ？

俺が助けても大丈夫なの？

これで原作崩壊したらどうしよう……気にしないけど。

「貴様いい加減にしろよ、この私を無視するとはいい度胸だ……ク  
ツクツク」

しかも半ばキレ気味だし。

「ああ、無視して悪かったな」

とりあえず撫でておくか。

小さな女の子（推定年齢500歳超えだけでも）は撫でるのが一番  
いいと思うんだ。

テオもこれでぐずるのが収まるし。

「な、何をする！／＼／＼」

「いや、かわいい女の子は撫でるのが一番だろ？」

これが俺のジャスティス！w

「お、お前は何者だ？／＼／＼」

「ん？ 俺か？」

とりあえず撫でながら話をする。

何かキレてたのも収まったっぽいし。

「俺は神宮運命だ」

「な！？ 紅き翼の【時空統べし帝王】だと！？ 何でこんな場所に！？」

何かものつそい驚かれた。

知名度で言ったらあんまり変わらないと思うんだけどね？

「んゝ、世界を見て回りたかったらかね。そっちは？ エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル嬢」

「な！？」

何で驚く……

その容姿と魔力を隠してるならまだしも、全開じゃん。

「……お前は私が怖くないのか？」

「あ？」

どういうこった？

「私は不死の魔法使い、【闇の福音】だぞ？ 人を大量に殺した殺戮者だぞ？」

「それなら俺と変わらねえよ」



俺の方が酷くね？

俺は自分の都合で人を殺したけど、エヴァの場合は殺さなきゃ殺されてただろ？

そのどこが悪いんだ？

「俺だってもう数え切れないくらいの人を殺したさ。数で言ったらエヴァンジェリン、お前よりもな」

それに俺には目の前の少女が悪の魔法使いとは思えないんだわ。その姿はどうみても

「だから俺はお前を恐がらねえよ。大体初めてあつてその人を恐怖するのはそいつがなんらかの悪意を向けてくるからだろ？ お前は俺に悪意の一つも向けてねえだろうが」

そう言つてもう一度エヴァの頭を撫でる。

「あ……………」

やっぱりだな。

誰かに救いを求める少女じゃねえか。

「ほら、泣くな」

「え？」

エヴァが自分が泣いているのに気が付いてないようだ。仕方なく俺がハンカチを出して拭ってやる。

「はあ…………そのハンカチはやるよ。んじやな」

「え……ま、待つ「シュン」行っちゃった……」

＼side エヴァ＼

「行っちゃった……」

初めて優しく扱われた。

今まで悪意しか向けられなかった私に優しい好意を向けてくれた。

「チャチャゼロ……」

「ナンダ御主人。口調ガ元二戻ッテルゾ？」

しょうがない。

この口調が私の体が成長しなかったら、せめて口調だけでもと思い変えたものだ。

「ねえチャチャゼロ。私は今を生きる意味を見つけたよ」

「ソウカイ。ナラ御主人二付イテ行クサ」

「ありがとう……」

真祖の吸血鬼になってから初めて見つけた生きる意味。

これで最後になるかも知れない生きる意味。

そして初めて恋という感情を見つけたかもしれない。

＼side out＼

「世界を巡る旅 出発一日前」

「本当に行くのかの？」

「ああ」

今いる場所はテオの寝室。

俺が世界を旅すると言ってからは、ずっとこんな感じだ。

「ごめんな。でも行かないといけない気がするんだ」

それにずっとここにいたら原作に介入出来ないし。

「むう……」

「はははっ。なら、一つだけ言う事を聞くってのはどうだ？」

「……何でもいいのかの？」

「ああ」

そう無茶ぶりなものはしてこないだろう。

テオも根は優しい子だしな。

「……なら妾と……バクティオー 仮契約をしてほしいのじゃ／＼／／」

「……へ？」

今なんと言いましたか？

バクティオー  
仮契約？

え？

「だから妾とバクティオー 仮契約をしてほしいのじゃ！／＼／／」

「……いいぞ？」

「……本当かの？」

「ああ」

別に減るもんじゃねえし？

しかも武器も手に入るかも知れないし、一石二鳥じゃん。

「んじゃ契約陣出すな。後は入るだけでOK」

「え？」

ん？

何か間違っていました？

「……キスじゃないのか？」

「え？ キスの方？」

「……（コクン）／／／／」

え？

めっちゃ恥ずかしいけど。

てか生まれて初めてのキスじゃね？

初めての相手が幼女？

「はあ……どっちが主だ？」

「もちろん妾じゃ！」

「OK……んじゃこの陣の中に入ってくれ」

バクティオー

仮契約の契約陣を創りだし、二人で中に入る。

……緊張するぜw

「んじゃ行くぞ？」

「う…うん… / / /」

めっちゃかわいいな、おい！

「チュッ」

「ん…」

そして飛び出すカード。

どうやら成功のようだ。

「どれどれ」

バクティオーカード

仮契約

主：テオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア

名前表記：サダメ ジングウ

称号：神に最も近き存在

色調：虹色

徳性：信仰

方位：中央

星辰性：恒星天

アーティファクト：テンナルセイハイ（天為る聖杯）

……

うん、あれだね。

称号……うん、間違ってるね。実際神の領域に足を踏み入れてるし？

色調……どんな色でもなれるってか？

徳性……神に近い存在だしね。

方位……真ん中か。まあどの方向って聞かれたら真ん中って答えるけどさ。

星辰性……あれか？ 一番神の世界に近い天球ってか？

アーティファクト……出してみなくちゃわからんが、今度出してみるか。

「つと、大丈夫か？」

「だ、大丈夫なのじゃ（さ、運命とキスしちゃったのじゃ／＼／＼）

」

「そつか。ま、何か用事があつたら念話で呼んでくれて構わないから。何時でも飛んで助けてやるさ」

「わかつてるのじゃ！」

「んじゃおやすみ」

「おやすみ……なのじゃ」

## 11話

放浪し続け早十数年。

久しぶりに俺は日本にやって来ていた。

居る場所は屋敷。

桜が咲き誇り、花見をするには絶好の場所だった。

「久しぶりだな、詠春」

「そうですね。いつ以来でしょうか」

俺は嘗ての戦友である詠春の屋敷に来ていた。

何故来たかと言うと、

「戦友が何時の間にか結婚して子供を産んでは思わなかったぞ」

「はははっ、ありがとうございます」

「結婚式に行けなくて悪かったな。その時期はどっかの秘境を探索してた筈だわ」

「変わりませんね、あなたは」

そう簡単に俺は変わらないさ。

俺は俺であり続けるんだからな。

「それにしても老けたな」

「そう言うあなたは本当に変わりませんね。普通なら私と似たようになる筈なのに」

「俺って不老だし」

「……そう言えばそうでしたね」

何だかんだで不老ということは知らせてある。

何か告発した時も「え？ ああ、運命ならありえるわ」とかで流されたw

「んで、用事ってのは？ まあ、あの子の事だろうけど」

俺は目線を詠春から外し、外の庭を見る。

そこには一人で蹴鞠で遊ぶ一人の少女。

楽しそうに、でもつまらなそうに遊んでいた。

「木乃香ちゃんの護衛……か」

「ええ。あなたが一番信用出来て、信頼出来ますから」

そう言っただけ俺を見つめる。

その瞳は何も不安はないというように。

「確かに俺なら年齢さえ操れるから友達として遊びながらも護衛出来るしな」

「ええ」

「だが」

これが一番の問題だ。

「魔法のことは黙っていて頂きたい」

「……………」

確かに理解は出来る。

一人の親としては子供にあんな血生臭い道を歩いて欲しくないことぐらい。

だが、そのせいで危険な目に合う可能性があるから納得は出来ない。



「それに何時かはバレるんだぞ？ 一年後かも知れないし、十年後かも知れない。もしかしたら一生知る事なく暮らせるかも知れないけど、明日知ることになるかも知れない」

「……わかっています」

「それに自分の力を知らないということがどれだけ危険な事か、前は理解しているんだろう？ 争いの火種になるかも知れないし、頭を弄って魔力源として扱う連中が出てくるかも知れない。それほどあの子の魔力は大きいんだ」

木乃香の魔力の大きさは、【千の呪文の男】ナギ・スプリングフィールドさえも上回っている。

しかも親が関西呪術協会の長にして、“紅き翼”所属の【サムライマスター】近衛詠春。

これだけの要因が揃っているのに、狙われない方がおかしい。

「……それでもです。何時かは踏み込んでしまってください。それでも……その日までは平和で幸せな生活を送らせてあげたい」

「……詠春」

たくっ……

この男は……

「最低の長だな」

「……ええ」

「だが 最高の親だ」

そう言っただけ俺は立ちあがる。

戦友がここまで頼んでいるんだ。

なら俺のやるべきことはなんだ？

「運命……？」

「協力してやるよ」

「……ありがとうございます」

「俺達は戦友で親友だろ？ どうせこの話は受ける気だったさ。ただ、お前の気持ちを知りたかっただけ」

ま、予想通りだったけど。

「んじゃ俺は木乃香ちゃんと友達になってくるわ。あの子寂しそうな目をしてるし」

俺は自分の能力である年齢変化を行う。

大体の感覚で6歳くらいになるように調節する。

そっぴいこの技 てか、この技だけかは知らんが、体の成長を変えるとどうやら精神もそれに引っ張られるらしい。

ま、引っ張られるって言うてもそこまで酷いもんじゃないけど、この場合は都合がいいだろう。

「凄いですね……」

「まあな。俺も滅多に使わないけど」

さ、詠春に木乃香ちゃんを紹介してもらうか。

俺は詠春に連れられ木乃香ちゃんの下まで歩いていく。

どうやらこの時期からかわいらしい。

テオとまた違った可愛さだ。

「こんにちわ」

side 木乃香

「木乃香、こっちに来なさい」

ほえ？

お父様が呼んでるわ。

どうしたんやろ？

「なあに？」

「紹介したい人がいるんだ。ほら、挨拶しなさい」

そう言ってお父様の後ろから現れたのは私と同じ年くらいの男の子。  
綺麗に銀色の髪の毛で、片目だけ金色に輝いていて綺麗。

「こんにちわ」

「えっと、こんにちわ」

ちゃんと挨拶出来たえ。

でもホント綺麗な子やなあ。

女の子って言われてもわからへんわあ。

「俺の名前は神宮運命。運命って書いてサダメって読むんだ。気軽に運命って呼んで」

「うーちゃん？」

何かかわいらしいなあ。

でもやっぱり仲良おなるにはこうした方がええしなあ。

「うん。何て呼んでも構わないよ」

「そつかあ。うちは木乃香って言うんよ。このちゃんって呼んでな」  
「わかったよ、このちゃん」

初めて同年代の友達が出来たなあ。  
なんかうれしいわ。

「彼は今日からこの家に住むから仲良くするんですよ？」  
「わかったえ」

うれしいわあ。

今日から毎日遊べるんやわあ。

「それじゃあ何して遊ぶ？」

「うーちゃんは何がええ？」

「俺はこのちゃんに任せるよ」

「そつかあ」

それじゃあ責任重大やなあ。

頑張っておもしろいこと考えてみるでえ！

＼side out＼

詠春の家で木乃香ちゃんと遊び始めて数カ月。

その間に詠春が刹那を拾ってきた？ようで、今では三人で遊ぶのが常になっている。

そして今日は少し屋敷から離れた場所に遊びに来ている。

「綺麗な川やなあ」  
「ほんとやあ」

二人がそう言つて川を覗きこむ。  
つて、これって原作のシーンじゃね？  
じゃあ放つておいたら溺れるじゃん！

「ほら二人とも、危ないからこっちに来るように」  
「えゝ、大丈夫やつて」  
「駄目駄目。ほら行くぞ」

俺は二人の手を引っ張つて川から離れていく。  
……これって危険はなくなつたけど刹那が苦悩するシーンも飛んだ  
んじゃね？

「心配性やなあ、うーちゃんは」  
「二人が怪我でもしたら俺は卒倒するからねゝ」  
「優しいなあ」  
「ほら、刹那も行くぞ？」  
「うゝ、うん……／＼／＼」

ま、いつか！

そして再び季節は春。  
この屋敷に綺麗な桜が咲き誇る。  
桜は出会い、そして別れを表す花。

それは例に洩れず、木乃香達にもやってくる。

「ホントに行くん？」

「ああ。本当ならもう少し早く出発する予定だったんだけどな」

俺は苦笑する。

本当なら刹那が現れてから数か月で去る予定だったのが、結局一年居てしまった。

「そう哀しそうな顔をするな」

俺は二人に近寄り頭を撫でる。

二人は気持ちよさそうに目を細めるが、やっぱり元気はない。

「きつとまた会える。約束だ」

小指を差し出す。

所謂ゆびきり。

これで木乃香ちゃん達の心が幾分か軽くなることを願う。

「「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲みます。指切った！」」

「

俺達三人は約束を交わす。

これから7年もしたら会うことになるからな。

「それじゃお別れだ。この一年間ホント楽しかったよ」

俺は二人に笑いかける。

でも、これが俺の心境。

本当に楽しかった。

こんなに安らいだ気持ちになったのは初めてだったかも知れない。

「うちも楽しかったえ」

「うちだって！」

木乃香ちゃんも刹那ちゃんも笑ってくれている。

送り出してくれる人が笑ってくれるのは本当にうれしい。

これで泣かれでもしたら行くに行けないし。

「あ、せっちゃん……（ゴニョゴニョ）」

「何このちゃん……（ゴニョゴニョ）」

ん？

どうしたんだ？

二人は顔を寄せ合い話し合っている。

それも終わったのか、二人は顔を離し、俺に近づく。

左が木乃香ちゃん、右が刹那ちゃん。

「感謝の印や！ チュッ／／／／」

「チュッ／／／／」

「……へ？」

頬にキスされた？

「えへへ／／／／」

「あう……／／／／」

ああ！ 可愛いな、ホント！

そんな思いも束の間、いきなり背後から殺気。

「で、では……行きましょうか？」

「はい。んじやな二人とも。いつかまた！」

そうして俺は二人から離れて行った。

そして一人から姿が眼に入らなくなつた瞬間に転移！

あ、危なええええええ！

転移する瞬間に後ろを振り向いたら詠春が刀を振り上げてた！  
死ぬかと思ったわ！

「久しぶりじゃの」

「ああ、久しぶり」

俺は命からがら転移した後、最近会っていなかったのでテオに会いに来ていた。

「どこに行っていたんじゃ？」

「ここ最近は京都だ」

「詠春のところか？」

「ああ」

そういった土産話などをしてテオに一言。

「また来なくなる日が増えるかも知れないけど、何かあつたら連絡入れてくれ」

「……何かあるのかの？」



「……ああ。また忙しくなりそうだ」

これから数年も経てば原作が開始される。  
そうしたら面倒な出来ごとが多々あるだろう。

「そうか……では、頑張ってくるのじゃぞ？」

「ああ。俺を誰だと思ってる。“紅き翼”最強の男、神宮運命だぜ？」

俺はそう言っただけを一撫でして部屋を立ち去る。

さあ、原作開始まで何しようかな？

そついやこの頃にナギが死亡したと公式に発表された。

ま、アイツは殺しても死なないような奴だし、そろそろ葱坊主のが生まれた頃だろ。

ついでに魔帆羅学園をちよろつと覗いて来たら、原作通りにエヴァは封印されてた。

どうやらあの会合は大丈夫だったんな。

よかった、よかった。

## 12話

「ん？ 誰だ？」

俺は珍しく電話が掛ってきたので出る。

基本的に電話を使わない俺なので、誰が掛けてきたかなど全然わからない。

「お久しぶりです、運命さん。タカミチです」

「お！ 久しぶりだな」

掛けてきたのは、大戦時代の少年探偵団、タカミチ少年だった。まあ今ではいい歳の青年だが。

「んで、どうした？」

「それがですね……運命さんに受けてほしい依頼があるんですよ」  
「ふむ……」

いちいち俺に連絡を入れるってことはネギの護衛ってところか？  
ということは、もう原作が開始されるのか。

「ナギの息子の護衛……か？」

「ッ！？ ……やっぱり知っていましたか」  
「まあな」

そりゃ原作を知ってるもん。

それでも大分と原作の記憶が無くなってきたけど。  
大筋は大丈夫なんだが、小ネタなんかは消えてるな。

「受けてもらえますか？」

「……一旦魔帆良に行く。そっから話をしよう」

「わかりました。いつくらいに来れますか？ 出来れば早めがいいですが……」

そう心配するな。

「今から行く」

俺はすぐに転移の魔法を使い、魔帆良に飛んだ。  
結界？ んなもん素通りに決まってるだろ。

「よう」

「フオツ！？」

とりあえず転移先は校長室。

どうせこの爺さん直々のご指名だろうしな。

しかしホントに人間か？

同じ哺乳類とは思えないぞ。

「運命君よ。体に悪いから急に転移してくるのは止めてくれないかのう」

「そう言っなよ。タカミチがすぐに来てほしいって言うから来てやつたんだぞ？」

「ははは……」

苦笑いを浮かべるタカミチ。

お前ならこのくらい出来ることは知ってるだろ？

「出来るとは思っていましたが、本当にするとは思ってませんでしたよ」

「まあ話はこれくらいにしておこう。で、依頼の詳細を聞こうか？」  
「そうじゃの。ま、早い話ナギの息子のネギ君がこの先生をすることでそのサポートを頼みたいんじゃないよ」

それにしてもサポートねえ。

原作を読んでも思ったけど、あいつにはサポートを就かせるより常識を教えてやった方がいいと思うんだがな。

「いつ来るんだ？」

「今年の3月じゃよ」

今は新年開けたばかりなので、後2カ月といったところか。

「で、受けてくれるかの？」

「……最低限だけだ。それ以外はしないがいいか？」

このくらいは乗り越えないとナギに追いつくなんて出来ないだろうし。

どうせ数カ月立てば死線も乗り越えないといけないんだから、これくらいでいいだろ。

「……最低限とはどれくらいじゃ？」

「死ぬような危険があれば助けるがそれ以外は何もしない」

「しかしのお……」

「どうせぬるま湯に浸かってる餓鬼だろ？ 一度こっちの世界の魔

法学校を見てきたが、ありや駄目だ」

本を読んで思っていた頃以上に酷かった。

何が酷いつて教育が酷い。

最早洗脳にも近いくらいに“正義の味方”に固執していたし、魔法の本質も何も教えていなかった。

そんな教育を受ければ、原作当初の餓鬼が出来上がる筈だ。

「しかし……」

「それ以外なら受けないぞ？ どっちにしろ、ナギの息子ってことで嫌になるくらいの険しい道を進むんだ。これくらい出来ないでどうする」

「運命さん……」

なんかタカミチが厳しい眼で俺を見てくるんだけど。

何かした？

「あなたは心配じゃないんですか？」

「は？ 誰を？」

「ネギ君ですよ！」

は？

何で俺が心配しなくちゃならんの？

「いや、俺関係ないだろ？」

「関係ないって！」

「だって俺が戦友で親友だと思ってるのはナギ・スプリングフィールドであつて、そのネギ少年には一度も会ったことないし」  
「なっ！？」

何で驚くんだよ。

言ってるだろ？

俺は基本的に大事な人が傷つかない限りどうだっていいって。

「てかタカミチも何に固執してるんだ？」

「それは「ナギの息子だからか？」ッ!？」

当たり前？

「一つ言えば、お前が見てるのは英雄の息子っていうことで、ネギ・スプリングフィールド個人として見てないだろ」

「そ、それは……」

「爺さんもそうだろ？ それにちゃんとネギ少年個人として見てるならわざわざ俺に依頼しなくてもここで魔法生徒なんかで通わしたらいいだろ」

「そ、それはのう……」

どいつもこいつも英雄の息子ってフィルター通して見やがって……

「だから俺は英雄は嫌いなんだ」

「運命さん……」

「馬鹿みたいにナギのことを英雄なんか仕立て上げなかったらこうならない未来だってあったのに」

やっぱり元老院は潰しておくべきだったか？

「はあ……んでどうする？ 最低限だけならサポートしてやるが」

「それしかなさそうじゃな。農達もちゃんと考え直さないといけないのぉ」

「そうですね……」

苦笑を浮かべる二人。

ま、ちゃんと言えれば考えてくれる分マシか。  
頭の堅い奴なんか言っても聞かないし。

「なら承諾だ。詳しい内容を確認するが、基本的に俺はここで何をしたらいいんだ？」

「そうじゃのう。やはり副担任がいいかの。ネギ君の赴任に会わせてお主にも頼みたいんじゃないじゃが大丈夫かの？」

「……別にいいけど、俺は教育免許なんか持ってないぞ？」

「それはこちらに任せておけ。それで教える教科なんじゃが、何が出来るかの」

「そうだな……」

教科ねえ。

英語なんか外国語は大丈夫だがそれはネギ少年が受け持つし。  
国語か？ いや、それなら体育の方がいいか。

「体育でいいだろ。あれなら適当で何とかなる」

「わかった。ならそうしておくとして、後は警備員も頼みたいんじゃないじゃが」

「裏関連か？」

「そうじゃの。暇があればタカミチ君同様に昼も広域指導員もしてくれと助かるんじゃないじゃが」

「給料を出してくれるのならやってやるよ」

「なら月に副担任の給料も合わせて50万。裏関連の仕事はそのたびに特別ボーナスを出すということでもいいかの？」

「了解」

現代の給料にしてはいい方だろ。

教員の仕事は適当でいいし、裏関連も結構人がいるからそんなに頑張らなくていいし。

「なら副担任の方は3月で、警備員の仕事はいつから始めたらいい？」

「今日から　　と言いたところじゃが、いろいろと用意もあるじやろうし一週間後からでいいかの？　学校の教師なんかに連絡を入れないといけないしの」

「はいよ。ならまた一週間後にここに来るぞ」

「午後6時までには来てほしいの。その時に詳しい説明とお披露目会といくからの」

「あいよ。んじゃまた一週間後」

俺はそう言い残して、また転移を発動する。

それにしても一週間か。

別にそんなに時間必要ないんだけどな。

＼side　タカミチ＼

「行きましたね」

「そうじゃの」

僕達の前にさっきまでいた“異質な英雄”。

「僕達はネギ君をちゃんと見ていなかったんですね」

「ああ。僕も運命君に言われるまで忘れてたよ。英雄の息子なんて言う色眼鏡を通して見て、ちゃんとその子個人を見ていなかった。



「これでは校長失格じゃの」

「僕も指導員として失格ですよ」

でも彼はちゃんと見ていた。

そしてちゃんと正してくれた。

「英雄の中の英雄……。でもその本人が英雄嫌いとは、なんという  
かまあ」

「ははは……」

本当にあの人には敵わない。

「校長、運命さんのお披露目会の時に腕試しをするつもりでしょう  
？ その相手を僕にやらせてほしいですけど」

力でも頭でも。

それでも挑みたい。

師匠とはまた違った壁。

「そのつもりじゃよ。それにタカミチ君以外に運命君と戦える人間  
などこの学園にいないしの。いや、エヴァが居たの。まあ封印され  
てるから駄目じゃが」

「そうですね。……そういえばエヴァって運命さんを探していたん  
じゃなかったですか？」

「おお！ そういえばこの学園に来た当初に言っておったの。それ  
に封印も運命君が解く手筈になっておる筈じゃ」

「……でも運命さん、全然そんなこと話してませんでしたよ？」

忘れてる？

あの人がそんなボ力をやらかす筈がない。

「もしやナギのヤツめ、伝えておらんな？」

「はははっ……」

ナギさん……何やってるんですか。

「後でエヴァに連絡いれておくかの。封印の方は次に運命君が来た時に話したら大丈夫じゃろ」

「そうですね」

## 13話

Side エヴァ

走る走る走る。

行き先はあのクソ爺がいる校長室。

あのクソ爺が今朝連絡を入れてきた。

『神宮運命が今日からこの学園にやってくる』と。

私はその真偽を問いただすために学園内を走っている。

「クソッ、魔力さえあれば……！」

それもこれもあの赤毛の馬鹿のせいだ！

アイツが登校地獄なんて言う呪いをかけなければこんなことにもならなかったんだ！

エヴァの過去

「ついに見つけたぞ【千の呪文の男】。この極東の島国でな」

【時空統べし帝王】神宮運命に会ってから一年。

あれから私は運命の情報を探し続けた。

もう一度会いたかった。

もう一度話したかった。

唯一私を怖がらず、【闇の福音】や【真祖の吸血鬼】などと見ずにエヴァンジェリン・A・K・マグダウェル個人として見れくれたのは彼だけだった。

「今日こそ……今日こそは！」

そうして探し続けたが手掛かりは一向に見つからない。

それに私自身の悪名もある為、大っぴらに探すことは困難だった。なので私が思いついた方法は一つ。

運命の仲間 “紅き翼”のメンバーを探し出し、運命の居場所を吐かせること。

そして今日、やっと紅き翼のメンバーを見つけ出した。

「【人形使い】【闇の福音】【不死の魔法使い】エヴァンジェリン……恐るべき吸血鬼よ。己が力と美貌を糧に何百人を毒牙にかけた？ その上俺を狙い、何を企むは知らぬが……」

こいつもか……

紅き翼のメンバーなら、と思っていたがやはりこいつも私を見てくれない。

「……諦める。お前では俺には勝てんぞ」

「うるさい！ パートナーのいない魔法使いに何が出来る！？ 行くぞチャチャゼロ！」

「アイサー御主人」

絶対に今日こそ運命の情報を手に入れる！  
そしてもう一度会っんだ！

「え〜とこの辺だっけ……」

「フ……遅いわ若造！ 私の勝ちだ！」

後一メートル。

これさえ通れば！

ズボッ！

へ？

「うわぁっ！？」

何だこれは！？

「なっ……これは！？」

「落トシ穴ダ、御主人」

「見りゃわかるッ！」

何でこんなものをつ！？

「ふははは！」

「ひっ……ひいひいひい！？ 私の嫌いなニンニクやネギ！？ いっ

……いやぁっ、や、やめろぉっ！」

「フフ……お前の苦手なものはすでに調査済みよ。最近何か嗅ぎまわっていたようだからな」

「オチツケ御主人！」

「あうっ」

「アアッ、御主人ノ幻術が解ケタ！」

何なんだ、こいつは！

ていうかこいつは恥ずかしくないのか！？

「ひつ……卑怯者ーッ！ き、貴様は【千の呪文の男】だろ！？  
魔法使いなら魔法で勝負しろーっ！」

「やなこった。俺は本当は5、6個しか魔法知らねーんだよ。魔法  
学校も中退だ、恐れ入ったかコラ。てか何で俺を追っていたんだ？  
「今頃聞くのか！？」」

そっというのは最初に聞くものじゃないのか？

「……【時空統べし帝王】の情報が欲しかったんだ」

「運命の情報？ また何で」

「ううう……」

言わないと駄目なのか？

いや、もしかしたら教えてくれるかも知れないし。  
でも恥ずかしい……

「……あいつに会いたい。もう一度話がしたい」  
「……………」

何でポカーンとした顔なんだ！？

おかしいのか！？

「アイツに会ったことがあるのか？」

「……一度だけな。崖から落ちそうになったところを助けてもらっ  
た」

「……それだけでアイツに会いたいのか？」

「違う！」

そんなことじゃない！

あいつは！ あいつは！

「あいつは唯一私を怖がらなくてくれた！ 私を【真祖の吸血鬼】だからと言って殺そうともしないで、ただのエヴァンジェリン・A・K・マグダウエルとして見てくれた！」

「……あいつらしいな」

眼の前の赤毛の魔法使いは笑っている。

何か懐かしいものを思い出すかのように。

「……運命に会いたいかな？」

「教えてくれるのか！？」

教えてくれるんだったら最初から教えてくれ！

「いやそれは教えられない。てか俺もあいつの居場所知らねえし。あいつって放浪癖あるから」

「な……」

「ま、その変わりだ」

「何だ！？ この強大な魔力は！？」

「確か魔帆良のじじいが警備員を欲しがってたんだよね……」  
「それとこれになんの関係がある！？」

ちよっ！

そんなテキトーな呪文を使うな！

「ん？ 魔帆良で警備員しながらあいつを待ってたらいいじゃね？ お前は運命に会えるし、じじいは強力な警備員を手に入れることが出来る。それにあそこならお前も賞金目当てでやってくる奴らの心配をしなくていいだろうしな。……あ、魔力は封印するけど」

「そんな適当な!？」

「大丈夫だつて。ちゃんと数年経ったら呪いを解くように運命に伝えておくから」

「それなら最初から伝えて「はい、登校地獄!」」

「う、うわあああああ!？」

〈過去終了〉

クソッ、本当に忌々しい出来ごとだった。

「クソ爺! 運命の話は本当か!？」

「これ、扉はゆっくり開けるもんじゃぞ」

「そんなことはどうでもいい! 運命の話を「そこを見たらいいじやろ」そこ?」

クソ爺が指さす方向を見る。

そこには私が会いたかった、初めて恋した人物が立っていた。

あの日から変わらず、綺麗な銀の髪に漆黒と金色の瞳。

その顔には柔らかい笑みが浮かべられている。

「運命……!」

そして私は駆け出した。

〈side out〉



えっと、これってどういう状況？

本当なら夜に来る筈だったけど、やることもないし早めに行こうと思つて校長室に訪れたら、「会わせたい人がある」なんて言われるから待つてたらこんな状況。

てかこれってエヴァだろ？

何で俺に抱きついてくるの？

ナギのことを好きになつたんじゃないかったの？

「ナギのヤツはお主は呪いを解くと言つておつたんじゃが……聞いておるか？」

「まったく」

「あやつは……」

爺さんは額に手を当て溜息を吐く。

え？

ナギが掛けた呪いつて俺が解くことになつてんの？  
初耳なんですけど。

「てかエヴァはいつまで泣いてるんだ？」

「だつてえ……」

……エヴァつてこんなキャラだっけ？

もっと威厳に満ち足りたキャラだったと思っただけど。

……あゝ、でもそんなこともないか。

初めて会った時も感じたけど、何かに恐れてる少女つて感じがしたし。

ということはあの喋り方も侮られないように変えたつてところか。

「ほら、泣くな。何かこんな出来事もあったな」

初めて会った時もこんな感じだったし。

「運命……」

「ほらほら」

予想以上にくずるので、抱っこしてみる。

「あう……／＼／＼」

「泣きやんだか……」

その分なんか顔を赤くしてるけど。

ま、気にしないでいいだろ。

「ふおっふおっふお。そんなエヴァは初めて見るのお」

「はあ……前も言ったけど変な色眼鏡は外して人物を見るよ？　こいつも１０歳くらいの少女に変わりにないんだ。ただ吸血鬼だけで殺そうとする方が間違ってるし、エヴァが殺した人間もエヴァをそんなくたらない理由で殺そうとした連中だろ？　それってただの正当防衛じゃん。何らエヴァに問題ないし」

「そうじゃのう。改めて考えてみると本当におかしい話じゃ」

「それに自分から吸血鬼になったわけないだろ？　１０歳の少女になるはずないし。それを考えたら外……つまり他の人間が実験の成果かなんかは知らんがエヴァを吸血鬼にしたんだろ。それなのにエヴァが狙われるのはちゃんちゃらおかしい話だ」

本当に腐ってるな。

何が正義だ。

正義ならなんでもしていいってのか？

「そうじゃの」

「ホントこんな可愛い女の子のどこが怖いんだよ」

「か、可愛いっ！？」

うおっ！？

「運命！ 私って可愛い！？」

「あ、ああ。特級の美少女だと思うぞ」

「えへへ……／＼／＼」

なんかキャラ崩壊したな。

ま、可愛いからいいけど。

「そついや呪いどうするか。ナギのヤツどうせ力技でやったからこ  
つちも力技でやるかな」

「呪い解けるの？」

「当たり前だろ。……そついや」

エヴァの吸血鬼化って解けるんだろうか？

「どうしたの？」

コクン、と首をかしげる。

ホント可愛いな、おい。

お持ち帰りしたくなる。

「いや、エヴァって吸血鬼止めたい？」

「え？」

ポカンと口を開ける。

まあ俺も解けるかどうかわからんけどさ。

「と…解けるの……？」

「わからん。けど、やってみないと始まらないし。エヴァがもし吸血鬼を止めたかったら俺が研究してみるけど」

「……グスッ」

「えええ！？」

何で泣くの！？

俺が悪いの！？

「……い、今までそんなこと、言われたことなかったから」

「まあそりゃそうか」

俺が少数派ってことは理解してるし。

「……やってくれるの？」

「やってほしいか？　もしかしたら解けないかも知れないし、魔力を失うかも知れないんだぞ？」

それもそうだ。

まず、どんな術式で真祖になったかも知れないし、どんな副作用があるかも知からない。

失われし技法でもある“真祖化”

それを解けるのかはわからない。

「……それでもやってほしい」

「よし、なら今日から時間が許す限り研究してみるか。どうせ俺も

エヴァも不老だ。いつかは解ける筈だ」  
「うん！」

花咲くような笑顔。

今日からエヴァも俺の“大切な仲間”入りだな。

「さて爺さん。エヴァの方はこれで大丈夫だろ。他の話　俺の家  
「私の家に住んでいいよ？」本当か？」  
「うん。どっちにしろ研究するなら同じ家の方がいいだろうし、私も手伝えるもん」

「んじゃ頼めるか？　爺さんもそれでOKか？」

「こっちは構わんぞい」

「ならエヴァの家に今日から住むか。よろしくな」

「えへへ」

寢床確保つと。

茶々丸もいるだろうから挨拶しないとな。

「んで今の時間が昼前か……。んじゃ爺さん18時にどこに行けばいいんだ？」

「いや、20時で構わん。もともと少しの説明をと思って18時に来てくれと頼んだじやしの。だから20時に世界樹前に来てくれ」  
「了解」

俺はエヴァを抱いていたのを降ろす。

その際に少し呻いていたが、撫でてやったら収まった。

そして俺とエヴァは校長室から退出する。

「それじゃ一旦エヴァの家に行くか。他にも同居人がいるだろ？」  
「うん。チャチャゼロと茶々丸がいるよ」

「そつか。ならちゃんと挨拶しないと。後昼飯も取らないと」

「それなら茶々丸に作ってもらお。茶々丸のご飯はおいしいんだよ」

「お！なら期待しておこう」

「うん！」

それにしても何でエヴァはこんな笑顔を俺に向けるんだ？  
ナギが好きだろうに。

## 14話

「ここがエヴァの家か？」

「うん」

校長室から歩いて数十分。

大通りを少し逸れ、森の一本道を歩いていくとその家はあった。  
今風の家ではなく、木で出来た趣のある一軒家。

「んじゃ同居人に説明をしなくちゃ「お帰りなさいませ、マスター」

」

「あ、茶々丸！」

「マ、マスター……？」

あらら。

エヴァの話し方が変わって困惑してら。

「あ、これは、その……／＼／＼」

「えっと、君が茶々丸でいいのか？」

俺が話を進めなきゃ一向に進む気配がなさそうだ。

「はい。ですがあなたは？」

「俺の名前は神宮運命。運命と呼んでくれ」

「運命様……でよろしいでしょうか」

「別に様付けなんかしなくてもいい。普通に呼んでくれて構わん」

「……なら運命さんで」

「さん付けもいらないんだけどな」

まあ茶々丸の性格ならこれで限界だろ。  
流石に様付けは嫌だけど。

「それでエヴァがなんでこうなったかは……俺もわからん」

「……はあ」

「でもエヴァは俺の大切な友人だ。そのところはわかってほしい」  
「それはわかります」

「そう？」

「はい。なんて言っても、マスターがそれほどの笑顔を見るのは初めてですから」

そうして茶々丸はエヴァの方を見る。

その顔は少し微笑み、慈愛のある横顔だった。

「そうか」

何とか茶々丸の信用を得ることは成功のようだ。

後は俺がこの家に住むことを伝えなくては。

「後、今日から俺もこの家に住むことになったんだが……大丈夫か？」

「そうなんですか？　なら部屋の掃除を後からしておきます」

「……ありがとう」

こうもあっさりと信用されると、何かなあ……

「……なあ茶々丸。私の話し方は前の方がいい？」

さっきまで恥ずかしがっていたエヴァが唐突に口を開く。  
その言葉は随分と悩んで発したものだった。



「私はどちらでも構わないと思います。どちらもマスターには変わりありませんから」

「そ、そうか？」

「はい」

「そつか。ならこの話し方でこれから過ごすね」

「わかりました、マスター」

「んじゃ話もついたことだし、家の中に入らないか？ 家の住居人が家の前で話すつてのもおかしいだろ」

話に一段落ついたので俺が提案。  
それはすぐに了承される。

「そついえばそうだね」

「それでは中に入りましょう」

「いやゝ、食った食った……」

「お粗末さまでした」

「ごちそうさま」

家に入ってからすぐに茶々丸の手作りの昼食。

エヴァが絶賛するだけあって、その味はとても美味だった。

「それにしても……」

部屋の周りを見渡す。

エヴァの二つ名、【人形使い】に恥じない量の人形が、部屋に所狭しと置かれている。

その種類は可愛いものから不気味なものまで。

「ケケケ。御主人、モトノ口調二戻ッテルジャネエカ」

「あ、チャチャゼロ」

「ソツチハ懐カシイ顔ダナ、【時空統べし帝王】」

「【時空統べし帝王】……最強の集団“紅き翼”の中でも最強の一角で、【千の呪文の男】や【千の刃】に唯一土をつけることが出来る人物。性格は温厚だがキレるとその周辺には何も残さないほどの怖さを持つ。他の二つには【銀色の英雄】【神獣の長】【一人軍隊】などがある。本名は神宮運命……ですか」

「俺ってお前に会ったことがあつたっけ？」

あの時見た覚えがないんだけど……  
何か茶々丸は俺のこと検索してるし。

「才前八見テネエカモ知レネエケド、俺ハチャント見テタサ」

「へえ……」

「マ、アレカラ御主人ガオモシロクナツタカラ俺トシテハイイケドナ」

「チャ、チャチャゼロ！／／／／」

「ケケケ」

「仲いいな」

そんな光景を眺める。

時間は昼も過ぎ、おやつの時間。

手元には紅茶とクッキー。

クッキーをぱりぱり食べながら紅茶を含む。

「顔合わせまで時間もあるし……エヴァ、さっそく調べてみるか？」  
「え？」

「何ヲ調べルンダ？」

「ん？ エヴァの吸血鬼化の解除方でも調べてみようと思ってな。  
呪いの方は爺さんに聞いてから解くようにするから」

「わかった」

「出来ルノカ？」

「さあ？ 呪いの方は多分解けるだろうが、吸血鬼化の方はなんとも」

俺は席を立ちあがる。

それに続いてエヴァも立ちあがり茶々丸もエヴァの傍に着く。  
チャチャゼロだけ置いていくのも何なんで、俺が肩の上に乗せる。  
チャチャゼロは「ケケケ」と言うだけ。

「エヴァって別荘持つてるか？ 魔法空間のやつ」

「持つてるよ。そっちで研究するの？」

「そっちの方が都合がいいし、時間も取れるからな」

「それじゃ付いてきて。別荘は地下に置いてるから」

「あいよ」

「とりあえず……」

現在居る場所はエヴァの別荘の中の家。

この中ならチャチャゼロも動けるようで、今は俺達と同じ机に座っている。

「何から調べてみるか……」

調べてみるとは言ったものの、何を調べればいいのか。

「そうだね……」

「ふむ……」

「ケケケ」

「紅茶のおかわりです」

俺とエヴァは首を捻らし考える。

やはり人間と違う体の構成　血や肉を調べるのが妥当か。

「とりあえずエヴァ、血を少しくれるか？」

「え、うん。ちょっと待ってね。茶々丸、何か血を入れるもの持ってきてくれる？」

「少しお待ちください」

そうして奥に取りに戻る茶々丸。

その間も俺は思考する。

血と肉以外だと書物関連を漁るのが妥当なんだが、まあないだろう。一応は失われし技法とまで言われてるくらいだし。

「こちらでよろしいでしょうか」

「運命、これくらいの大きさで大丈夫？」

「ん？」

エヴァの声でふと顔を上げる。

そこには大きな瓶を持つ茶々丸が一人。

「いやいやいや、そこまで大きいのじゃなくていいから。牛乳瓶一本くらいで大丈夫だから」  
「ならこちらを」

そう言つて手渡す牛乳瓶。  
持つてたのかよ。

「んじゃそれ一本溜まるくらいの血を入れてくれ」  
「わかった」

そう言つて、早速手首を魔法で出来た刃で切る。  
……リストカットか。  
見ため少女がリストカットはなんかな……  
しかもその光景を表情変えないでするところも……

「ふう……このくらいかな？」  
「ん、それくらいで大丈夫だ」

リストカットのおかげで牛乳瓶はすぐに満杯になった。  
真っ赤な牛乳……絶対に売れないな。

「体調は大丈夫か？」  
「うん。このくらいならへっちゃらだよ！」  
「でもなあ……」

そついうエヴァの顔を見る。  
疲労は見られないが、少しだけ顔が強張っているような気がする。  
まあ牛乳瓶一本くらいの血なら、大の大人なら献血で抜くこともあるだろうが、エヴァは10歳くらいの少女だ。  
その年代の、しかも女の子はそんな血を抜かない。

てか血を抜くこともない。

「……俺の血でも飲むか？」

「いいの！？」

「少しくらいならな」

あんまり血を吸われるって言うのは、気持ちのいい行為ではないだろうが、まあ一人の少女の笑顔の為と思えば安いものだろう。

「ほら」

「う、うん……／／／／」

とりあえず腕を差し出す。  
何で顔が赤いんだ？

「あむ、チュー……／／／／」

「……少しこそばゆいな」

一分くらいエヴァは俺の血を吸う。

「はふう……」

「おいしかったか？」

血の味なんぞ俺にはわからない。

てか絶対人間の血を飲んでもおいしいとは言わないだろう。  
血の主成分は鉄だしな。

「う、うん……今まで飲んだ血の中で一番おいしかったよ？／／／／」

「それならいいけど」

とりあえず、血も飲んで体力も回復したようだ。  
俺はそれを見て、エヴァが注いでくれた血を空間の魔法を発動して  
収納する。

「その魔法は？」

「ん？ ああこれ？ これは空間系統の魔法で、所謂収納魔法だな」

「へえ……珍しいね」

「そうですね。というよりも空間系統の魔法を単身で使える術者は  
いなかったのでは？」

「そうだな。だから俺が【“時空”統べし帝王】って言われてるん  
だけだな」

「なるほど」

さて、血も貰ったからすぐに研究してもいいけど、少しは資料を  
探した方がいいかな。

それより最近体を動かしてなかったし、少し運動するか。  
夜になったら顔合わせで少し戦わなきゃならんだろうし。

「なあエヴァ。少し食後の運動でもしないか？」

「運動？」

「そ。茶々丸やチャチャゼロも加えてもいいし」

俺はそう提案する。

茶々丸はあまり表情を変えなかったがチャチャゼロは、

「マジカ！？」

むちゃくちゃやる気がありました。  
戦闘狂ですね。

「私は別にいいけど……大丈夫なの？」

「運命さんがいくら最強クラスの魔法使いでも、ここならマスターも本気を出せますし私と姉さんがいたらしんどいと思いますけど」  
「ま、大丈夫だろ。それにそのくらいしんどいと運動にもならないかも知れないだろ？」

少しの挑発。

こんな可愛い少女でも、高いプライドを持っている。  
それを刺激するとどうなるだろうか。

「うー！ それならやってあげるよ！ 絶対に目に物を見せてあげるんだから！ 茶々丸、チャチャゼロ、いくよ！」

「アイサー御主人」

「了解、マスター」

三人は席を立ち、家の外にある広場に行く。

俺もそれに付いていき、準備をする。

久しぶりの対人の戦闘。

俺は戦闘狂とは自分では思っていないが、少しは気持ち昂ぶる。

「ルールは簡単。相手に負けを認めさせること。武器や魔法は何でもあり。OK？」

「わかった」

「久シブリニ気が昂ブルゼ」

「畏まりました」

俺の準備も終わった。

まあ準備と言っても、ナイフを手につただけ。  
後は少し体をほぐし、戦闘状態へと移行する。



「戦闘開始はこのコインが地に落ちてからだ。行くぞ?」

俺はコインを弾く。  
そして

チリンッ

始まった。

## 15話（前書き）

約三カ月ぶりの投稿。時間があまりないので内容が薄いかも……？

## 15話

「さて……」

相手の陣営は先頭にチャチャゼロ、その少し後ろ茶々丸。最後に遠く離れたところにエヴァ。

まあ普通のフォーメーションだな。

零距离戦のエキスパートのチャチャゼロに、近中距離をカバーする茶々丸。そして大威力の魔法を放つエヴァ。普通の魔法使いなら瞬殺出来る布陣だ。

「ま、俺には少し足りんかもしれんけどなッ！」

足に気を溜め、そして爆発させる。音もない縮地と比べると、隠密性などは劣るが、速度では圧倒的に勝る。

それにより一瞬で先頭に立つチャチャゼロの下へ辿り着く。

「マジカヨッ!？」

「まずは一発目だッ! 閃走・六兎」

「グウッ!」

瞬時に距離を詰めたチャチャゼロに対して六連続の蹴りをお見舞いする。

だが、流石はエヴァと一緒に何百年もの間戦い抜いた猛者だ。俺の蹴りを間一髪でガードに成功している。しかし、威力までは防ぎきれず、後方に吹き飛ばされる。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラックッ! 茶々丸ッ! 援護よろしくッ!」

「畏まりました」

詠唱を開始するエヴァ。その顔には若干の焦りが混じる。まあ長年の戦友が一瞬で吹き飛ばされたのは見たのだから、仕方ない。

エヴァの言葉に頷いた後、茶々丸はすぐに俺へと立ち塞がる。

現在は手にハンドガンらしきものが二丁存在している。接近戦用の武装だろうか。

銃にはあまり詳しくないので、種類などはわからない。

「では一手願えますか？」

「喜んで、レディ？」

その言葉を呟いた瞬間、茶々丸は手に持つ銃を発砲。二丁から出る弾は実弾ではなく、魔力弾らしい。エヴァからの供給される魔力を弾にしているのだろうか。そうすると、弾切れという心配はないので、ずっと弾幕を張られることになる。

「だが、この程度の弾幕じゃ俺は止められんよッ！」

「なっ!？」

常人では避けることすら難しい弾幕を、俺はすらすらと抜き通る。いくら弾幕を張ろうと、弾速は音速を超えないし、同時発射しているわけでもないの、どこかに必ず抜け道が存在する。そんなものを探すくらい俺にはどうってこともない。

「一人目えッ! “爆衝”！」

「かはっ……」

手元で炎を爆発させ、その衝撃波で敵を仕留めるのが本来の使い方

なのだが、これは相手を殺すものではないので、せいぜい気絶する程度に留める。

その衝撃波を食らった茶々丸はノックアウト。完全に気を失って倒れる。俺はそれを受け止め、戦闘の被害がなさそうな場所へ一瞬で転移させた。

「闇の吹雪」！」

「げっ!？」

何時の間にか詠唱を済ましたエヴァが魔法を放つ。

流石は闇の福音と呼ばれただけはある。闇の吹雪一つでも他の魔法使いとは魔法運用などが段違いだ。

「光の爆熱」

だが、バグと呼ばれる俺には届かない。

詠唱した闇の暴風と、俺の無詠唱の光の爆熱が衝突し合う。拮抗は一瞬で、その後に両方ともが四散する。

「このクラスの魔法を無詠唱って……。流石は“銀色の英雄”だね」

「まあそうなんだが、出来ればその名で呼ばないでほしいな。俺は英雄って言葉嫌いだし」

「あ、ごめん。なら“時空統べし帝王”かな？」

「そっちならいいさ」

軽口を叩き合いながらも、互いに小規模の魔法で応酬。今で戦いが始まって1分くらいが経過した。反対に言えば、あれだけの密度を繰り返したのに、未だ一分しか経っていない。

「復活ダゼ!」

「帰って来たか……」

迫りくるナイフを、自身のナイフで捌く。

蹴り飛ばしたチャチャゼロもいつのまにかに戦線復帰。その小さな身体からは想像もつかないような腕力とナイフ技術で俺に迫る。

俺もそれに対応してナイフで斬撃を繰り返しながら、無詠唱でエヴァの魔法を防いでいく。

一瞬の攻防。一つのミスが命取りになるその状況に、俺は徐々に血が滾るような感覚に陥る。血生臭い殺し合いではなく、純粹な強さを求める戦い。

脳はアドレナリンを多量に分泌し、身体は興奮状態になる。身体が歡喜し、脳はもっと速くと指令を送る。

「久しぶりだな、この感覚は……ッ！」

身体が軽い。迫りくるナイフも魔力の嵐も全て紙一重で避ける。そして一瞬の隙を突き、チャチャゼロへと迫った。

「これで二人目だッ！ 連星」

「ナッ！？ ガアッ！」

刹那の間に十の斬撃をチャチャゼロが持つナイフへと繰り返す。その衝撃に耐えられずナイフは吹き飛び、無防備になったチャチャゼロに当て身。これでチャチャゼロも戦闘不能となった。

「ここまで強いなんてね……」

「まああれだけ見栄張って負けたら恥ずかしくだろ」

「そうだね」

「んで？ 降参するか？」

間違いなくしないだろうが、一応の確認。

「そんな訳ないよ」

「だろうな。ならこつからは魔法だけで戦うか。接近戦だと間違いなくエヴァじゃ俺に勝てないしな」

「それはそうだけど……。でもいいの？」

「気にするな……。魔法も強いぞ？」

「そっか。なら遠慮はしないよ？」

それが合図となり魔法の応酬。

「闇の精霊300柱“魔法の射手・連弾・闇の300矢”！」

「光の精霊300柱“魔法の射手・連弾・光の300矢”！」

互いの魔法の射手は相殺し合う。俺は基本的にほとんど、てか上級の呪文さえ無詠唱で行けるのだが、それだと流石に圧勝してしまうので、基本的にエヴァに合わせる。

縦横無尽に飛びまわり、三次元の戦いが展開される。

飛び交うのは魔力。繰り出されるのは魔法。練られるのは術式。発現されるのは事象。

「“氷神の戦槌”！」

「“失われた炎”！」

巨大な氷が俺を圧死させようと迫り、それを溶かすように大炎が迸る。大炎は火柱となり、その氷石を溶かし、その熱はエヴァを蝕もうとする。

それをエヴァは少し離れたところで次の魔法を詠唱し、炎を消し去る。

追撃に魔法の射手を撃ってきたが、縮地で避ける。そのまま、エヴァ

アの真上を取り詠唱。

「日は影 光は闇 朝は夜 全ては表と裏があり表裏一体 矛盾すら“混沌の波動”！」

全ての色が混ざり合い、鬨ぎ合うかのような波動がエヴァに直撃する。咄嗟に障壁を立てたようだが、出来あいのもんじゃない防ぎれない筈だ。

「“エクスキューションーソード”！」  
「ッ!？」

間一髪で頭を下げ回避。

「危なッ!？」  
「ちえ……」

どうやってさっきの魔法を防いだんだ？ 服の汚れからすると、直撃さえもしていないようだ。

「さっきの魔法をどうやって回避した気になってるの？」  
「まあな」

「結構簡単なんだけどね。まずあの一瞬で影の魔法で自分の分身を作りだす。その時に私の身体を一時的に闇系統の魔法で見えないようにして、魔法を放たれた瞬間に影の転移魔法で後ろをとった、これだけだよ」

「これだけって……。流石に経験値が高いな。俺ですら及ばないか」  
「500年間生き抜いてきたからね。これくらい出来なきゃとつくにどこかで野垂れ死んでるよ」



苦笑を零しながらそう告げる。

その顔はあまり見たくない。何故かそう思った。

「まあいつか。ほら、続きをしようぜ？」

「そうだね」

そう言いながらも、次で最後にしよう。

チャチャゼロも茶々丸も起き上がっているようだしな。

「最後は大技で締めるか」

「負けないよ？」

二人同時に詠唱を開始する。

「汝 黒き魂にて我を清めたもう おお冥王よ、至高なる者の強き  
集いの内に、我は死の凍嵐を身に纏いたり」

「黒よ 黒にして黒たる我らの王 偉大なる暗黒 疾風なるもの  
黒にして真珠たる我は計画の変更を要請する それは悲しみを砕く  
黒の一撃」

逆巻く魔力の奔流が辺りに迸る。

エヴァの下には超絶な氷が。俺の下には激烈な風が。

互いが同じ時に見合わせ 笑った。

「 今 新たなる契りによる氷雪の力束ねん！ “絶対零度の氷  
槍”！」

「 禁断を越えて振るわれる風の一撃 完成せよ！ “風神の激  
”！」

同じタイミングで繰り出される最上級の魔法。

片や超巨大な絶対零度を纏う氷槍。

片や全てを斬り刻む風の神が起こす烈風。

互いの魔法が喰らい合う。風は氷を斬り刻み、氷は風を無視して押し進もうとする。

やがて二つの魔法は威力が弱まり、最後には相殺という結果が残った。

## 15話（後書き）

今度はいつ投稿出来るだろうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4961k/>

---

ネギま！？ 原作破壊物語

2010年10月12日20時09分発行